

心からの笑顔を求めて、新たな未来へ

名取市震災復興計画

平成23年10月

名取市

● 目 次 ●

基本方針編	1
序章 復興計画の策定	2
1. 復興計画策定の趣旨	2
2. 計画の位置づけと計画期間・構成	2
第1章 復興に向けた課題	4
1. 長期総合計画における名取市の目指す将来像	4
2. 復興に向けた課題	5
第2章 津波への備えの方針	8
1. 沿岸部の復興に向けたまちづくりの考え方	8
2. 沿岸部の土地利用の方針	10
第3章 復興への想いと目標	13
1. 復興への想い	13
2. 復興の目標	14
基本計画編	17
第4章 閑上・下増田のまちの復興に向けた事業方針	18
1. 閑上地区のまち再建の事業方針	18
2. 下増田沿岸部のまち再建の事業方針	22
第5章 復興を牽引する連携プロジェクト	24
1. 閑上と下増田のまち再生プロジェクト	25
2. 産業の速効再生プロジェクト	26
3. 統合医療で元気プロジェクト	27
4. 空の道・水の道交流プロジェクト	28
5. 記憶のまちプロジェクト	29
第6章 復興への取り組み	30
1. 暮らし	31
2. 産業	32
3. まち	33
資料編	35

基本方針編

序章 復興計画の策定

第1章 復興に向けた課題

第2章 津波への備えの方針

第3章 復興への想いと目標

序章

復興計画の策定

1. 復興計画策定の趣旨

平成23年3月11日に本市を襲った東北地方太平洋沖地震は、我が国観測史上最大規模の地震であり、地震による被害とその後に続いた大津波により、本市沿岸部を中心に極めて甚大な被害を及ぼしました。

名取市震災復興計画（以下「復興計画」という。）は、この震災により大きな被害を受けた市民生活の早期再建をはじめとして、地域の社会的機能や社会経済活動の迅速な復旧と、半世紀にわたり築き上げてきた本市の魅力の回復と拡大など、市民の皆様とともに計画的な復興に取り組んでいくための指針として策定するものです。

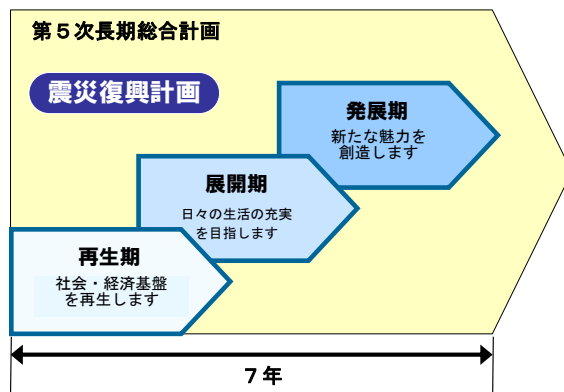
2. 計画の位置づけと計画期間・構成

(1) 計画の位置づけ

復興計画は、名取市第五次長期総合計画（平成23年度～平成32年度）の基本構想と基本計画を踏まえ、復旧・復興に関する震災対策の特別計画として位置づけます。

(2) 計画期間

復興計画の計画期間は、平成23年度から平成29年度までの7年間とします。さらに、全体7年間の計画期間を次の3期に区分し、復興に向けて、段階的に取り組んでいきます。



- 再生期●
社会・経済
基盤の再生

被災者支援を中心に社会的機能や社会経済活動の復旧に集中的に取り組んでいくとともに、将来への展望を拓くビジョンを創っていく期間
- 展開期●
日々の生活
の充実

再生期から発展期への移行期間として復旧を完了させ、新たな都市空間の整備など、地域再生に向け、持続可能な都市づくりに取り組んでいく期間
- 発展期●
新たな
魅力の創造

さらなる飛躍を目指して、社会的要請に対応した名取の新たな魅力の創造に取り組んでいく期間

（３）計画の構成

本計画は、序章から第３章までの基本方針編と、第４章から第６章の基本計画編により構成しています。

基本
方針
編

序章 復興計画の策定

本計画の策定の趣旨と位置づけ、計画期間を定めています。

第１章 復興に向けた課題

震災前に本市が目指していた本来の将来像（名取市第五次長期総合計画基本構想）を念頭に置き、市内の被災状況を踏まえて、復興に取り組んでいく上での課題を整理しています。

第２章 津波への備えの方針

津波によって特に甚大な被害のあった沿岸部の復興に向けたまちづくりの基本的考え方や津波対策と土地利用の方針を定めています。

第３章 復興への想いと目標

復興に取り組む想いととも、どのような暮らしや産業、まちを目指していくのかについて目標を定めています。市とともに、復興の主体となる一人ひとりの市民と事業者、名取の復興を支えていく全ての人々が共有すべき考え方です。

第４章 閑上・下増田のまちの復興に向けた事業方針

壊滅的な被害を受けた閑上・下増田沿岸部のまちの復興に向けた事業方針を定めています。

第５章 復興を牽引する連携プロジェクト

復興への想いと「暮らし」「産業」「まち」の分野別の目標実現に向けて、本市の復興の取り組みを牽引していく連携プロジェクトを定めています。

第６章 復興への取り組み

復興に向けて取り組んでいく主要施策を「暮らし」「産業」「まち」の分野別に体系化しています。主要施策は、再生期・展開期・発展期の段階ごとに実施していきます。

基本
計画
編

（４）計画及び事業の推進に向けた取り組み

本計画は、次の３つの考え方で、着実な復興への取り組みを進めていきます。

- ◇進行管理並びに実効性のある取り組みとなるよう、復興計画に合わせた組織体制の見直しを図るとともに、部局横断的な体制による５つのプロジェクトのスピード感ある推進
- ◇市民・企業・専門家等の力を生かした事業の推進
- ◇国・県・関係機関・隣接市等との調整

第1章

復興に向けた課題

1. 長期総合計画における名取市の目指す将来像

平成22年11月に決定された名取市第五次長期総合計画基本構想においては、名取市の地域特性や魅力を生かしながら、発展への主要課題などに取り組み、目指す将来像「元気創造 これからも名取」の具現化を目指していくこととしています。

名取市第五次長期総合計画基本構想

名取の魅力・特性

- 1 100万都市に隣接し仙台空港が所在する広域交通・交流拠点都市
- 2 水と緑がきらめく自然豊かな環境都市
- 3 数多くの歴史遺産を有する浪漫あふれる歴史文化都市
- 4 多様な産業が集積する産業成長都市
- 5 魅力ある生活空間として、人口増加を続ける元気な都市
- 6 全国レベルの豊富な地域資源を有する魅力満彩都市

発展への主要課題

- 1 だれもが住みたくなる安全・安心で快適な生活環境の整備
- 2 名取の未来を託す心豊かな人を育む教育環境の整備
- 3 人がふれあい、健やかに暮らせる環境の充実
- 4 地域経済の活性化と職住近接型のまちづくりの推進
- 5 風土、地域特性、地域資源を生かした施策の展開
- 6 安定的で堅実な地域経営活動を確立するための、行財政改革と協働の推進

目指す将来像

元気創造 これからも名取

- 誇るべき郷土として、市民に愛着を持たれ、安全・安心でいきいきと暮らすことのできる都市
- 魅力に満ちあふれた活力と交流のある都市
- これからも、そしていつまでもここで暮らしたいという選択される元気なまち

基本目標

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1 健康でいきいきと暮らせる都市の創造 | 4 飛躍を支える都市基盤の創造 |
| 2 人を育て歴史文化が輝く都市の創造 | 5 活力と交流に満ちた都市の創造 |
| 3 安全・安心・快適な都市の創造 | 6 安定的で活力ある都市の創造 |

2. 復興に向けた課題

震災と津波によって、わたしたちは多くのものを失い、ダメージを受けましたが、一方で、日常の避難対策や訓練の重要性、強い絆で結ばれたコミュニティの大切さなどを教訓として学びました。さらに、本市が本来もっていた地域特性や魅力が復興の大きな力になる可能性を再認識し、これらを一日も早く復旧・復興を果たし、次代へ継承していくことが重要であるという想いを強く抱いたところです。以上の点から、わたしたちは、次に掲げる5つの課題を設定し、ふるさと名取の復興に取り組んでいきます。

名取市の被災状況

- ◇震災の発生：平成23年3月11日（金）14時46分
宮城県沖を震源とした震度6強（マグニチュード9.0）の地震発生
- ◇人的被害：市内での遺体収容数 911体^{※1}、市民の遺体収容数 805体^{※1}
不明者数 76人^{※1}
- ◇家屋被害：住宅 11,889棟^{※2}
非住宅 2,419棟^{※2}

※1：平成23年8月22日現在

※2：平成23年8月19日現在

震災で失ったもの ダメージを受けたもの

- ◇尊い人命
- ◇水辺の生活基盤・家屋
- ◇産業基盤
- ◇地域の魅力ある景観や伝承遺産
- ◇心身の健康

震災で再認識したもの

- ◇津波の恐ろしさ
- ◇日常の避難対策や訓練の重要性
- ◇コミュニティの絆の大切さ
- ◇ボランティアをはじめとした支援活動のありがたさ
- ◇地域特性や魅力がもつ可能性

復興に向けた課題

- ① 災害への対応力を高め、健やかで安心感ある暮らしを回復させる
- ② コミュニティの絆を強化し、市民力を結集したまちづくりを展開する
- ③ 産業基盤・地域資源のスピード感ある復旧と事業展開で活力と雇用を創出する
- ④ チャレンジ精神に富んだ連携で、地域の新しい魅力や元気を次代に継承・発展させる
- ⑤ 次代の社会的要請に応え、多世代が安心して暮らす新たな生活舞台をつくる

課題① 災害への対応力を高め、健やかで安心感ある暮らしを回復させる

今回の震災と津波被害は、土木構造物による防御の想定をはるかに超えた災害が起こり得ることや避難訓練など、ソフト面での対策強化の必要性をわたしたちに示しました。

こうした経験を踏まえて、甚大な被害を受けた沿岸部において、生活基盤や産業基盤、自然環境の再生を進める中で、様々な自然災害に対する防災・減災対策を進め、被害を最小限にとどめる取り組みが必要です。

また、沿岸部だけでなく、市全体で震災の教訓を風化させることなく語り継ぎ、防災意識を高めて、日常的に避難対策や訓練に努めることで、生命を守ることを大前提に災害への備えを充実させ、適切に対応できる地域の力を身につけていくことが求められています。

そうした中で、復興に向けた第一歩として、住宅や仕事など、今後の生活の不安を取り除き、心身のダメージや疲れを癒して、健康を保てる環境を取り戻すことが重要です。

課題② コミュニティの絆を強化し、市民力を結集したまちづくりを展開する

応急仮設住宅等での仮住まいから恒久的な住宅へ移行できる環境づくりにあわせて、災害に強いまちづくりを進めながら、互いを支え合うコミュニティ（絆）を強化することが重要となります。

また、わたしたちは、震災発生直後の救援、学校等の施設への避難、不自由な避難所での生活、家族の捜索、がれき撤去などの大きな苦難の中で、隣近所や家族などで助け合うコミュニティの絆の大切さを知り、さらには、ボランティアをはじめとした支援活動のありがたさに改めて気づきました。

この苦難から立ち上がり、復興に取り組んでいくためには、このような市民の力、市外から支えてくれる力が不可欠であり、これらを結集し、生かしていくことが求められます。

課題③ 産業基盤・地域資源のスピード感ある復旧と事業展開で活力と雇用を創出する

復興への道のりの中では、暮らし・産業・まちづくりなどの様々な分野の取り組み課題にタイミングよく、戦略的な展望をもって対応していくことが求められます。

例えば、甚大な被害を受けた閑上・下増田地区の復興のための事業計画の検討と推進、将来の生活設計の見通しが立たず不安を抱えている方々の生活再建支援をはじめ、閑上漁港や水産加工施設、園芸農業施設などを早期に機能回復し、いかに生業の再開や地域経済、活力、雇用の回復につなげていくかが重要となっています。

そのため、復興のための施策・事業を適時適切に展開していくための予算措置や意思決定、地域での合意形成、市民・企業・専門家等との連携、国・県・関係機関・隣接市等との調整などを円滑に行っていくよう、本計画の推進体制を整えていくことが重要です。

課題④ チャレンジ精神に富んだ連携で、地域の新しい魅力や元気を次代に継承・発展させる

本市は、震災によって大きなダメージを受けながらも、豊富な地域資源に恵まれています。これらの魅力・地域特性とともに、仙台空港が所在し、100万都市に隣接する優位性などを背景として、さまざまな活力創造の可能性・潜在力を見直し、新しい価値創造にチャレンジし、名取らしい復興を進めていくことが、新しい元気の創造につながります。

そして、このような取り組みを将来まで持続させ、名取の魅力・元気を次の世代に引き継いでいくことが求められています。

そのためには、農業・漁業・水産加工業などの地域に根付いた生産機能、名取の風土を育む自然環境や歴史文化資源等の観光交流機能など、多様な連携を展開し、未来指向で戦略的に都市機能の導入や集約・連携を進めることで、都市の活力を持続的に高めていくことが重要です。

課題⑤ 次代の社会的要請に応え、多世代が安心して暮らす新たな生活舞台をつくる

わたしたちの未来を拓く復興は、復旧にとどまることなく、基本的な都市の安全性の確保を前提に、居住・企業立地（事業活動）・観光・交流などのあらゆる側面から、市民や市外の住民・企業、そして名取で生まれ育った子どもたちからも選ばれる魅力を創造していくことが重要となります。

特に、復興のためのまちの再建にあたっては、安全対策とともに、多様な世代が生活できる住宅の整備や再建支援、子育て・介護等の社会サービスの再構築、買物や交通などの日常生活利便性の確保とともに、震災前から課題となっている急速な少子高齢化や地球環境問題など、社会的要請にも対応した取り組みを効果的に進めることで、次代に通用する新たな生活の舞台を創造していくことが求められます。

第2章

津波への備えの方針

1. 沿岸部の復興に向けたまちづくりの考え方

① 住む人に安心感があるまちづくり

- ◇津波を含む自然災害軽減を踏まえた土地利用を行う。
- ◇地震、津波、洪水、液状化、地盤沈下などの自然災害に対する被害の軽減を総合的に配慮した計画とする。

② 名取市全体で考えるまちづくり

- ◇名取市の復興に向けた土地利用は、非浸水地域を含め、名取市の未来を築く計画とする。
- ◇市内の既存ストック（中心市街地、りんくうタウン、丘陵地の団地など）を活用する。
- ◇市内各地区や近隣市町村との連携を強化したネットワーク型の都市を形成する。

③ 土地の記憶を継承するまちづくり

- ◇長い時間かけて形成された自然の地形、地盤、景観を生かす。
- ◇閑上海岸、名取川河岸、あんどん松、広浦、貞山運河、防潮林、居久根（イグネ）などを継承する。
- ◇暮らす人、訪れる人に安心感を与え、生業に、観光レクリエーションに、再び海と共生するまちをつくる。
- ◇夏祭りや社寺など地域の文化やつながりを継承する。

④ 地域・集落の持続性を大切にするまちづくり

- ◇農業、漁業、水産業などそれぞれの未来の夢を描き、その実現に挑戦する。
- ◇極端な人口減少、少子高齢化に伴い地域持続が困難にならない新たな魅力をつくる。

⑤次代の暮らしを見据えた、新たなまちづくり

- ◇市民が満足する中心性をもつコンパクトな都市とする。
- ◇地球環境時代に向けた地域づくりを実践する。
- ◇沿岸部に立地した都市の住民として、海と共存するライフスタイルを求める。

2. 沿岸部の土地利用の方針

(1) 津波対策の方針

名取市は長い間、大きな津波被害がなく、津波に対する認識が十分であったとは言い難い面がありました。今回の津波は、多くの人命・家屋・家財を奪い、経済活動にも甚大な損失を及ぼしました。

この経験から、想定すべき災害のスケールを見定め、これに対応した防波堤などの施設整備、避難や救助活動に役立つ道路・公園など都市基盤施設の整備、緊急時の情報伝達システムの向上、身近な避難場所の計画的整備、コミュニティにおける日常的な避難訓練など、総合的に対策を図ることで、最小限の被害に留めることを目指します。

想定される津波に対し、以下のような多重防御ラインと避難路の確保により対応することを基本とします。

多重防御の考え方

◇1次防御ラインは、仙台湾に数十年から百数十年に一度程度発生している規模の津波（津波防護レベル）への対策で、陸側への浸水を最小限に抑える海岸堤防の強化、名取川河川堤防の強化、並びに自然地形を生かした盛土等で補強した市街地形成によって、津波による被害から人命、家屋等の財産を守り、経済活動を継続させることを目的とする。

◇2次防御ラインは、それ以上の巨大津波（津波減災レベル）で1次防御ラインを越えた場合にも多重的に防御することによって、津波のエネルギーを減衰させ、内陸部への浸水を遅延させ、避難時間を確保して、あらかじめ計画された避難経路等により人命を守ることを目的とする。

また、経済的損失を軽減させるとともに、経済活動の早期復旧が可能な被害に抑えることを目的に、海岸線と仙台東部道路間に、宅地の嵩上盛土・河川堤防の嵩上・道路の嵩上・空港防御堤などを連続配置した計画とする。

このような考え方に基づき、津波の想定規模・堤防の高さ・宅地の地盤高をいくつか設定し、津波シミュレーションを行った結果、2つの防御ラインにより目的とする対策が検証できました。

その具体的な位置、高さ、構造は今後国や県と協議が必要となりますが、安全確保について一定の目処を確認することができました。

多重防御の考え方を踏まえ、沿岸部における津波対策の方針を次に示します。

津波対策の方針

①堤防の強化や津波防災機能を備えた道路による多重防御

- ◇海岸堤防、河川堤防を強化する。
- ◇南北道路に津波堤防機能を付加する。(市道(盛土)、県道塩釜亘理線(盛土))

②自然地形の活用や盛土による安全の確保

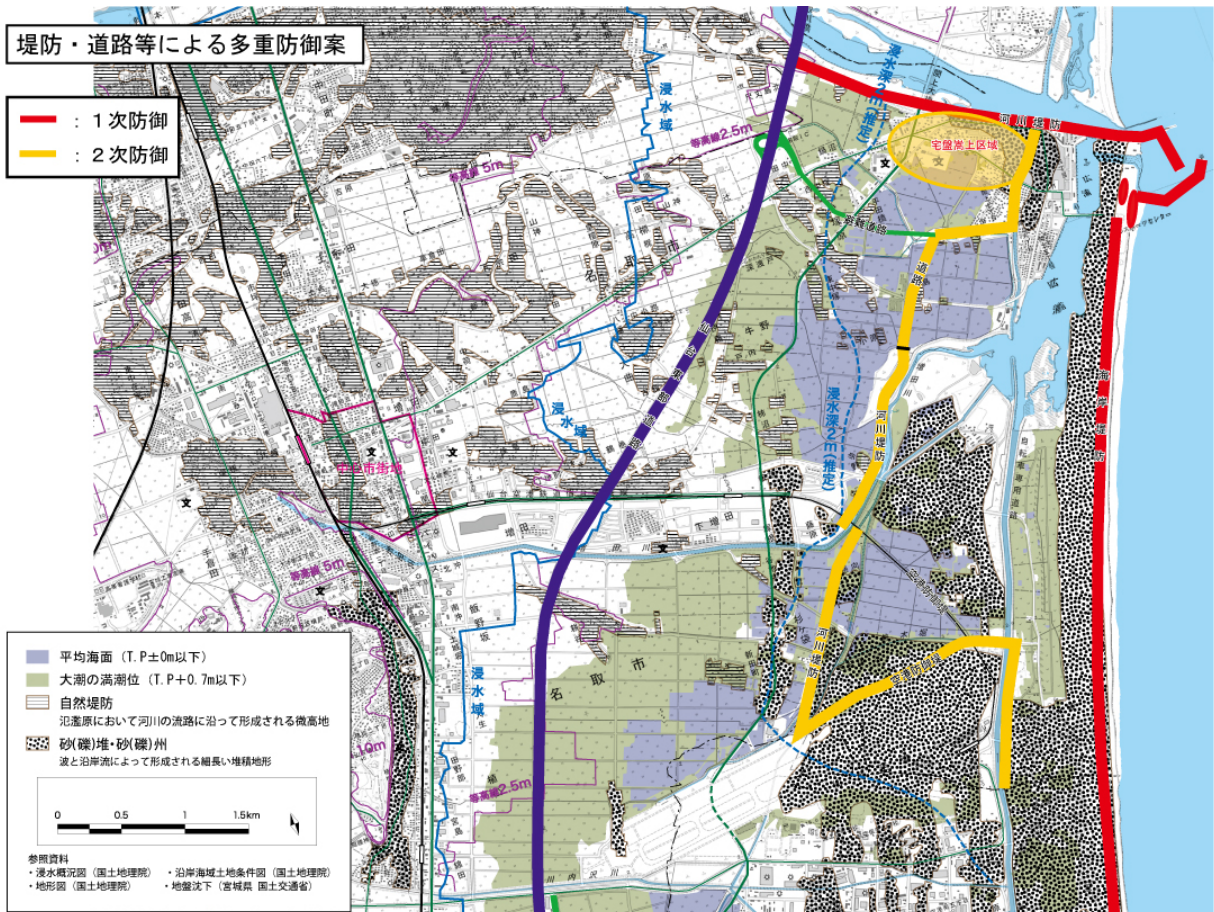
- ◇河川流や海流などにより生み出された自然地形(自然堤防や砂州など)を生かした土地利用を展開する。
- ◇地盤沈下が発生しているため、沿岸域の市街地・集落の復興にあたっては盛土を検討する。
- ◇津波からの安全性を確保するため、盛土や津波回避機能を擁した高床式構造物を検討する。

③高台避難場所と避難路の確保

- ◇避難場所として、丘状公園や耐浪建築物、盛土構造の高台などを配置する。
- ◇避難場所への多様な避難道路(避難時の交通手段(徒歩/自動車)、複数ルート、沿道建物が倒壊しても通行可能な幅員構成、渋滞を引き起こさない道路容量の確保など)を整備する。

④防災システムの強化と防災教育の充実

- ◇停電を想定した自立的な避難路誘導のあり方を検討する。
- ◇夜間発災も想定した防災報知システムを配備する。
- ◇子どもへの防災教育、地域での避難訓練を徹底する。



※ 2次防御ラインの位置については、国、県、隣接市等と調整のうえ今後検討

(2) 土地利用の方針

沿岸地域の土地利用については、海岸堤防や2次防御ラインの設置を踏まえ、大きく2つの地域に分け、以下の通り設定します。

①地域産業の再生と新たな産業を誘導するゾーン

(1次防御ライン(海岸堤防等)から2次防御ラインの間)

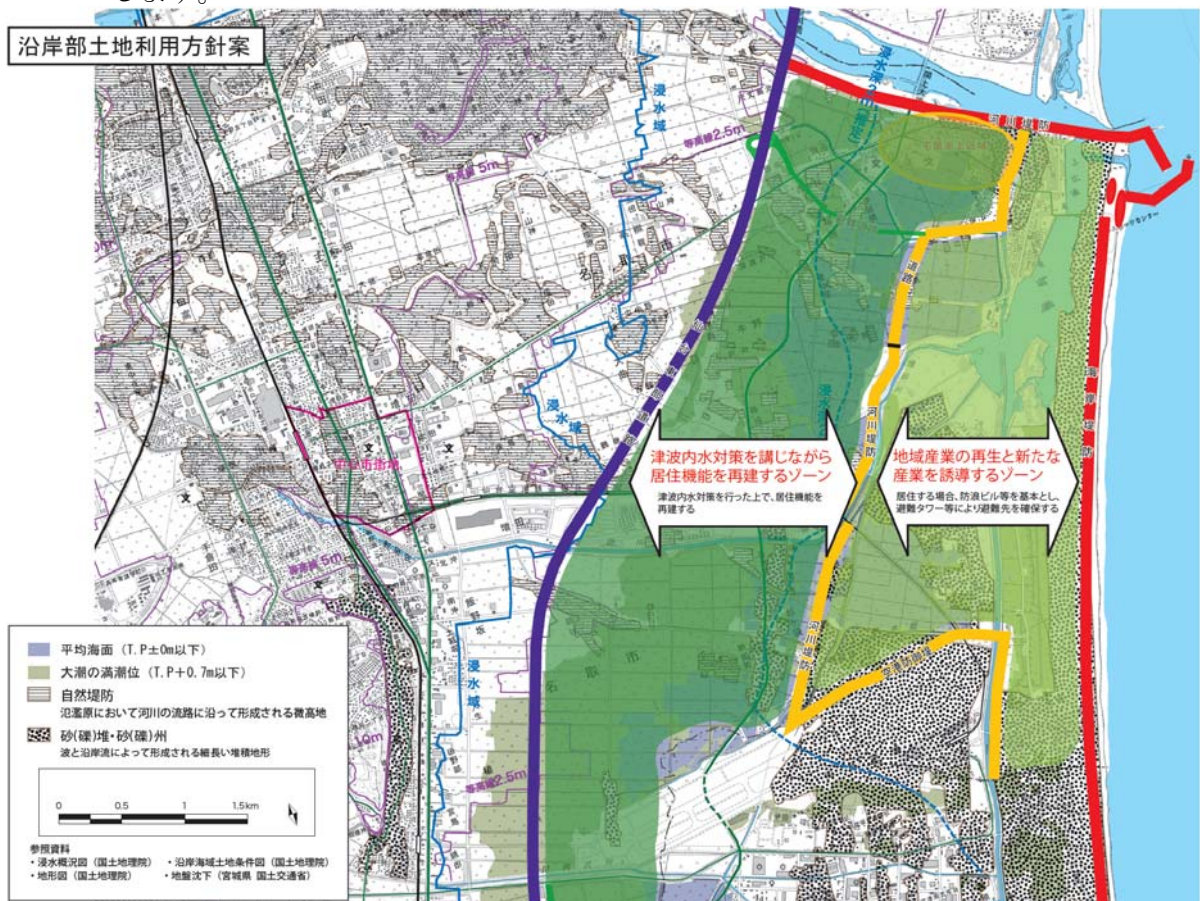
海岸線から2次防御ラインの間のゾーンについては、今回のような津波の場合、津波の流速を抑え、浸水を浅く留めることが困難と想定されるため、基本的には居住を制限します。特に、閑上地区の市街地については、水産業、水産加工業等の地域産業を再生するとともに、新たな産業を誘導するゾーンとします。

なお、居住する場合は耐浪建築物を整備することとし、津波避難施設(津波避難タワー、津波避難ビル等)により避難先を確保します。また、海岸沿いについては、白砂青松の景観を持続させるべく、市民生活や農業を守る防潮林の再生を目指します。

②津波や内水対策を講じながら居住機能を再建するゾーン

(2次防御ラインから仙台東部道路の間)

2次防御ラインから仙台東部道路の間のゾーンについては、避難対策及び防災システム等の津波対策や、内水対策を施すことにより、居住機能を再建するゾーンとします。



※ 2次防御ラインの位置については、国、県、隣接市等と調整のうえ今後検討

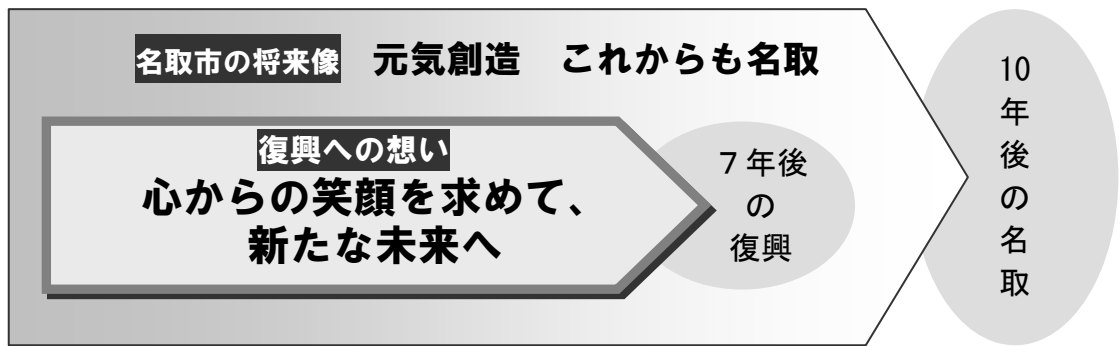
第3章

復興への想いと目標

1. 復興への想い

復興への課題を念頭において、これから復興に取り組んでいくために、みんなで共有する想いとして、『**心からの笑顔を求めて、新たな未来へ**』を掲げました。

本市の復興は、この想いを共有して取り組みを進めていきますが、さらにその先では、震災前に定めた名取市の将来像『**元気創造 これからも名取**』（名取市第五次長期総合計画）につなげていくことを念頭に置いています。



安心して家族と暮らす住まい、誇りをもてる仕事、震災前にあったいつもの生活リズム、隣近所の人々とのありふれたふれあい、受け継がれてきた地域の伝統。そんな“あたりまえ”をひとつひとつ取り戻し、暮らし続ける誇りや明日への希望を実感できる環境をつくり、みんなが心から笑顔になれる日常の回復を目指します。

また、震災は、まちやわたしたちの暮らし、産業に大きな被害をもたらしましたが、被災した地域をはじめ、市民、名取市に関わる様々な人々、事業者や活動団体、行政などが一体となって、震災前よりももっと魅力ある名取の魅力・元気を創造し、未来の子どもたちに自信を持って引き継いでいけるまちを目指します。

2. 復興の目標

復興への想いの実現のために、「暮らし」「産業」「まち」のそれぞれの分野において、復興を成し遂げた将来の名取をイメージし、それを目標に実効性ある取り組みを展開していきます。

復興の目標

- 〔暮らし〕の目標** ① 互いに支え合い、強い絆で結ばれた暮らし
- 〔産業〕の目標** ② 地域資源と仙台空港を生かして集積・連携する産業
- 〔まち〕の目標** ③ 多様な世代が未来を感じて、安心して暮らせるまち

暮らし

目 標

①

互いに支え合い、強い絆で結ばれた暮らし

復興のイメージ

- ◇多くの尊い命とともに大切な財産は失われたものの、暮らしを再建して再び立ち上がった人々の絆や伝統、誇りは健在である。
- ◇地域の問題を自ら解決する力や支え合う絆がしっかりと地域に根付き、互いに見守り合いながら、長く健康を保って、みんなが安心して暮らしている。
- ◇震災を目の当たりにした子どもたちも、まちへの愛着を失うことなく、地域の人々と心を通わせ合いながら、元気に成長している。

目標を達成するための視点

- 震災による心身のダメージの解消と未来の担い手育成
- 家族（個人）の暮らしや住宅の再建支援
- コミュニティの絆の強化と減災に向けた常日頃の取り組み育成
- 個々人がコミュニティとつながるネットワークの構築
- 行政、市民、企業、NPOの協力体制の構築

産業

目 標

②

地域資源と仙台空港を生かして集積・連携する産業

復興のイメージ

- ◇漁業・水産加工業、農業が機能的に再編・集約・強化され、付加価値の高い地場産品がブランド化されている。
- ◇新たな需要に対応できる産業集積によって企業立地が進み、地域の活性化や若者の雇用に貢献している。
- ◇名取らしい風景や自然環境が再生され、仙台空港と閑上地区がネットワークでつながり、観光・交流が活発になっている。

目標を達成するための視点

- 閑上の貞山運河東側を産業用地とし、速やかな産業復興に着手
- 地域に根付いた産業の早期再生とさらなる集積・連携強化
- 産業集積の基盤となる設備等の民間活力導入などによる整備
- 名取らしさを感じさせる地域ブランドの確立
- 仙台空港や貞山運河を生かした新たな産業・観光業などの展開

まち

目 標

③

多様な世代が未来を感じて、安心して暮らせるまち

復興のイメージ

- ◇津波対策をはじめ、総合的な安全への配慮がなされた市街地で、安心感を持って暮らしている。
- ◇学校・公民館等を中心とした生活圏で、暮らしを支える施設や道路がバランスよく配置され、快適に暮らしている。
- ◇名取の風土や自然を楽しみながら、高齢者や若い世代とその子どもたちが暮らし、そのライフスタイルが魅力となって、新たに居住が進んでいる。

目標を達成するための視点

- 潮風の感じられる、災害に強いまちの構造を確立
- 災害対策の強化に向け、耐浪構造の集合住宅等を計画的に配置
- 学校、コミュニティ施設等をまち全体で守る
- まちなかには、徒歩圏内に避難場所（施設）を整備
- 鎮魂のための空間、震災の教訓、復興への道のりを語り継いでいくための空間を確保

基本計画編

第4章

閑上・下増田のまちの復興に向けた事業方針

第5章

復興を牽引する連携プロジェクト

第6章

復興への取り組み

第4章

関上・下増田のまちの復興に向けた事業方針

今回の大津波により、壊滅的な被害を受けた関上・下増田沿岸部について、次の事業方針に基づき関係地権者の方々と緊密な協議・調整のもと復興に向け取り組んでいきます。

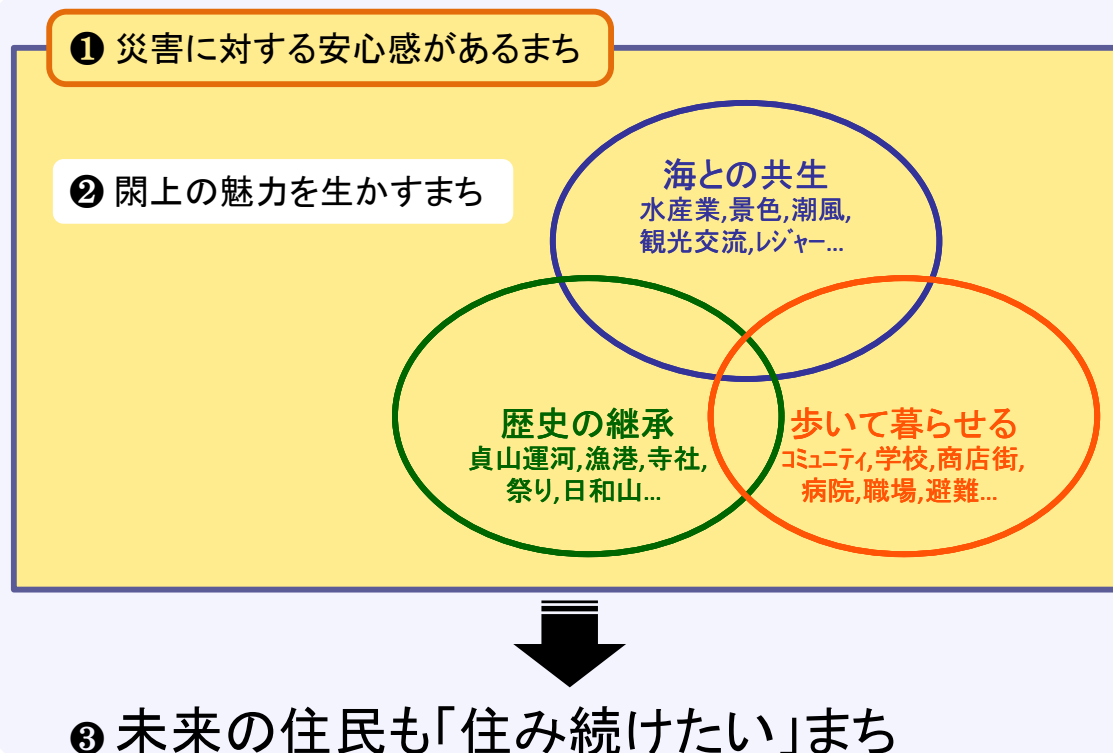
1. 関上地区のまち再建の事業方針（被災市街地復興土地区画整理事業）

江戸時代より栄える関上漁港は、全国的にも有名なアカガイをはじめとした仙台近郊の漁港町として位置づけられていました。また、近年では「ゆりあげ港朝市」「サイクルスポーツセンター」「ゆりあげビーチ」など名取市民をはじめ、隣接市町からも多くの人々が来訪する交流の場として、海と共生する街のイメージを形成しています。

今回の津波により壊滅的な被害を受けましたが、津波被害を教訓に災害に強いまちを再構築することはもちろんのこと、地区全体での防災力を高め、安心して暮らせるまちを現地再建していきます。

また、再建にあたっては、これまで培われてきた歴史・文化や地域特性などを後世に継承しながら、魅力あるまちづくりを進め、これまで住んでいた市民はもとより、これから居住を求める方々にも“住んでみたい”“住み続けたい”と選択されるまちを再構築していきます。

地区住民の早期の再建や財産の保全を前提に、現在の位置での被災市街地復興土地区画整理事業による再建を基本として、引き続き検討を進めていきます。



●参考：関上地区の土地利用イメージ

沿岸部の土地利用の方針及び関上地区のまち再建の事業方針を踏まえると、以下のような土地利用イメージが考えられます。

①海岸部の土地利用イメージ

海岸沿いには、市民生活や地域農業を守る防潮林の復旧を図ります。防潮林の造成は時間がかかることから、条件を整え、市民協働の事業として早期に着手します。

また、堅固な防潮林の造成には真直ぐな根を伸ばせる盛土が求められるため、瓦礫の活用を検討していきます。市民からはコンクリートの海岸堤防でなく、白砂青松を持続できる盛土の要望があることも勘案し、国、県との協議の中で、美しい海岸部の風景を残しながら、地区の安全性を高めていきます。

②貞山運河西側の土地利用イメージ

関上の新しい住宅市街地の位置については、仙台東部道路の西側と、現在の関上1、2丁目中心の名取川沿い、その中間の県道塩釜亘理線付近を選ぶ3つの住民意見があります。津波対策を施した関上1、2丁目の安全は計画目標を達成できると判断されることから、ここを中心に県道塩釜亘理線付近を含むエリアを選定していきます。今後、更なる安全・安心のための具体的な街のイメージ形成や、まちの復興に伴う各世帯の経済的な問題などは、具体的な内容を含めて今後協議を続けていきます。

③貞山運河東側の土地利用イメージ

貞山運河東側については、基本的に非居住とし、次のような施設の整備により活用を図っていきます。

- ◇3・11メモリアル施設（例えば、メモリアル広場やミュージアムなど）
- ◇産業関連施設（例えば、水産業・空港連携産業・観光産業など）
- ◇マリン・フィールドスポーツ施設
（例えば、マリーナ、ビーチ、フィッシング、サイクリングなど）

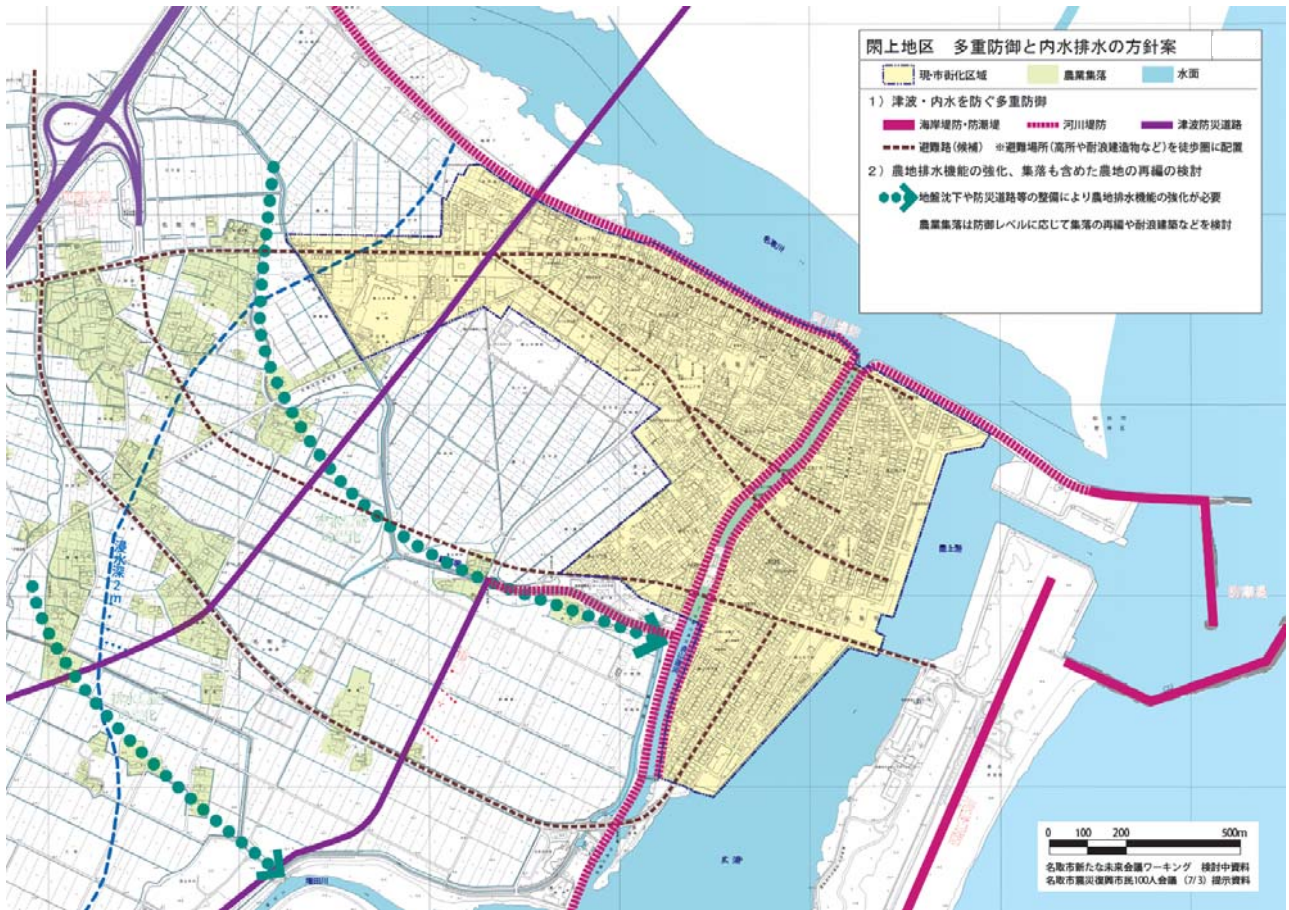
このエリアの基盤整備に関しては、時間がかかる嵩上げ等は最小限に止め、耐浪建築を基本としたまちづくりを行い、仮設的に産業拠点を整備し、その運用を支援することにより、スピード感あふれる各産業の復興を図っていきます。

また、魚市場背後への堅固な防浪構造物の配置や、貞山運河水上バス運営などについても検討していきます。

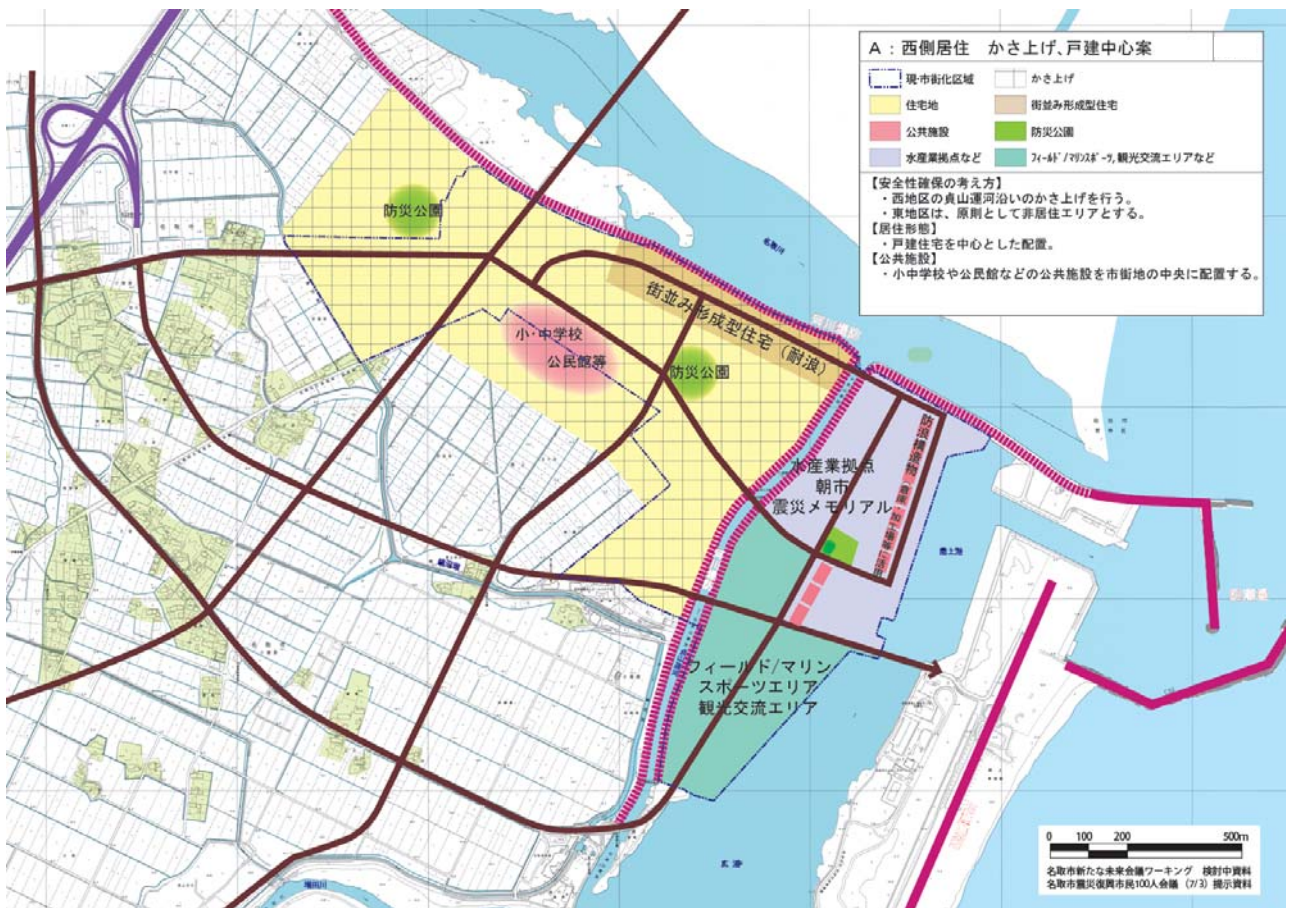
④田園・集落地区の土地利用イメージ

2次防御ライン西側の田園エリアには農家集落が点在しており、これらは主に自然堤防や砂州の微高地に建設されていますが、今回の津波による被害もあります。したがって、ニーズに対応して地盤の嵩上げや施設の耐浪化を施すなど、きめ細かな対策が必要だと考えられます。

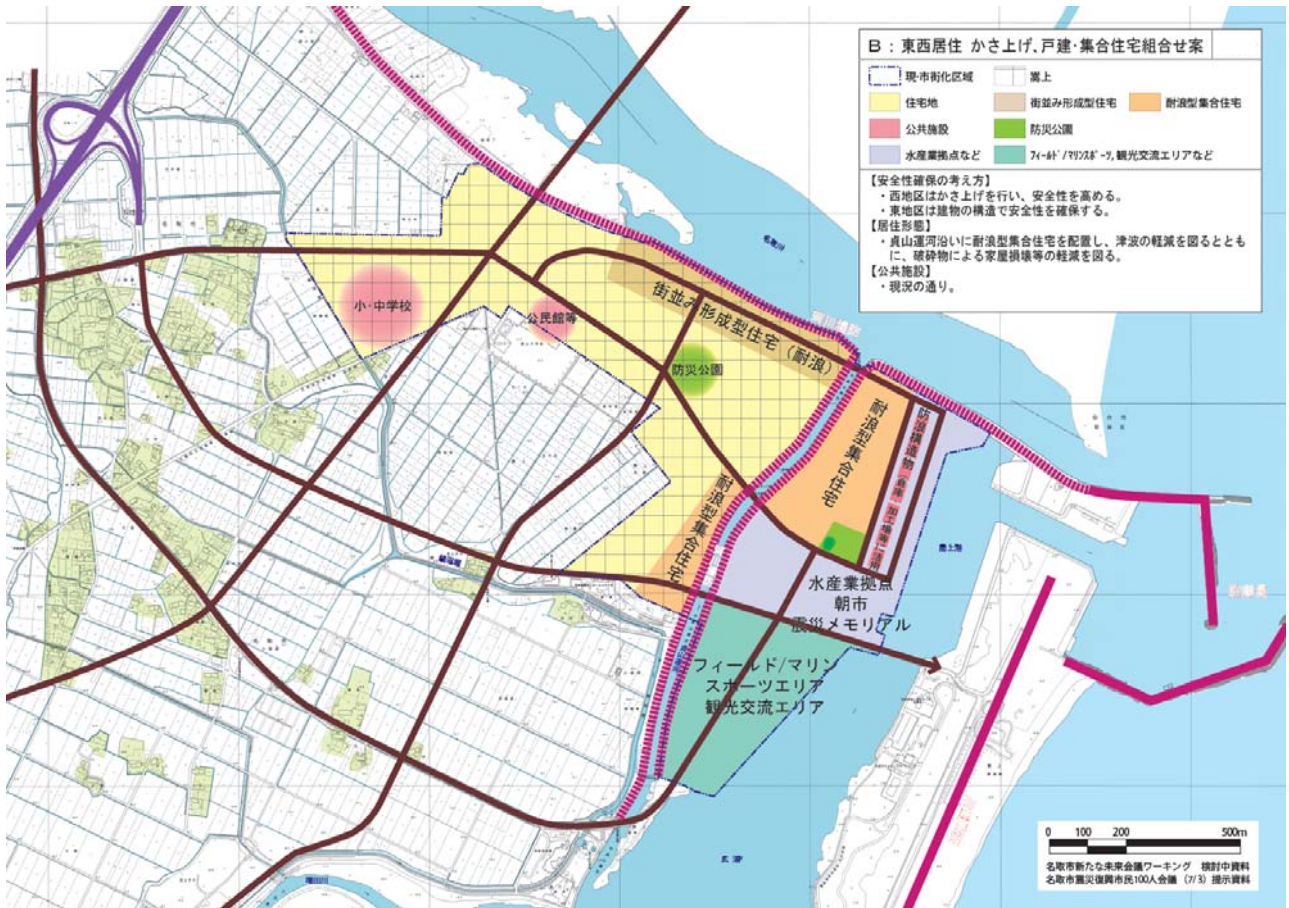
また、2次防御ラインの整備に伴い内水氾濫などの課題もあるため、内水排水対策には十分な対策を講じていきます。



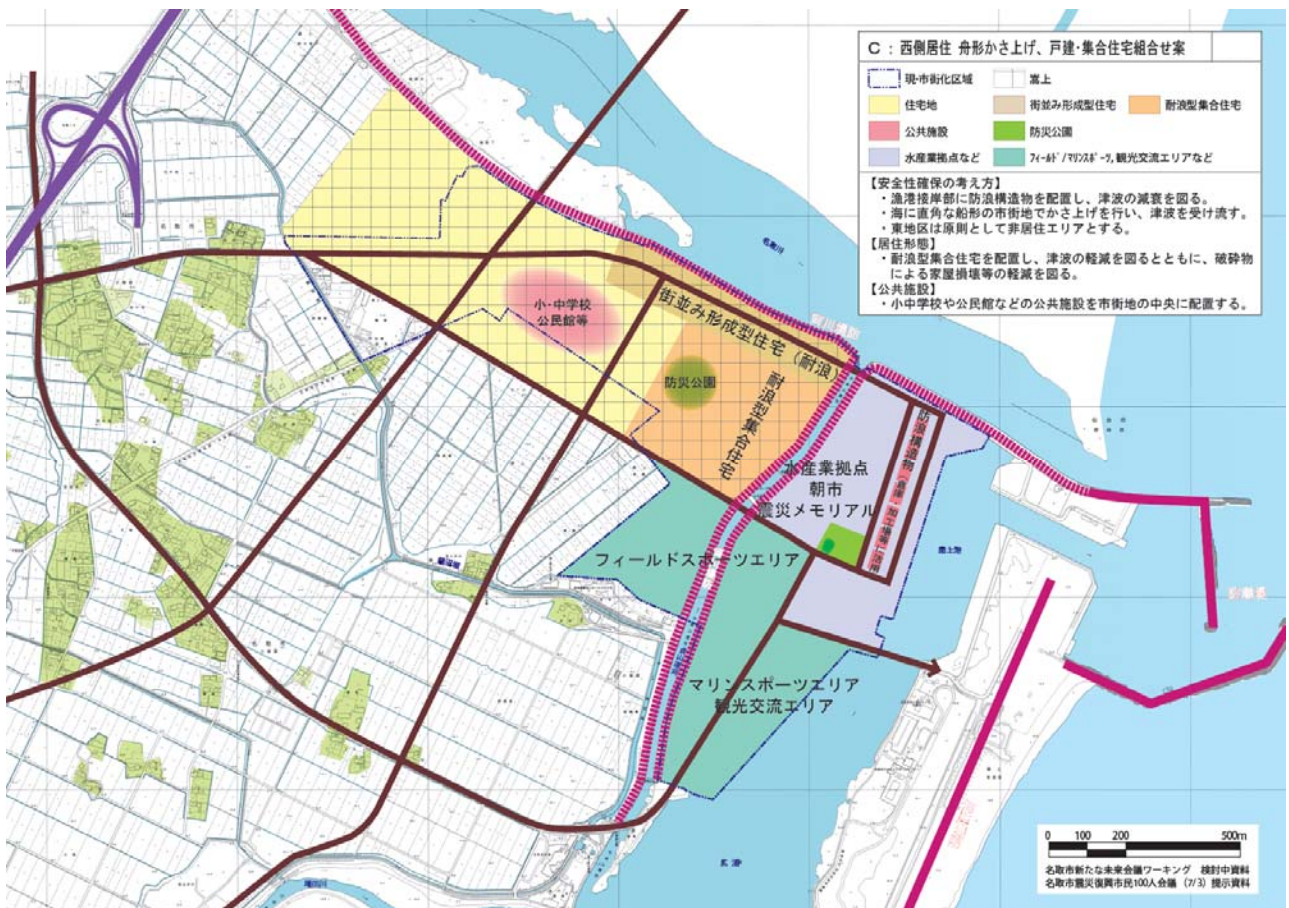
図：関上地区の多重防御と内水排水対策イメージ



図：関上地区の土地利用イメージA（西側居住 かさ上げ、戸建中心案）



図：閑上地区の土地利用イメージB（東西居住 かさ上げ、戸建・集合住宅組合せ案）



図：閑上地区の土地利用イメージC（西側居住 舟形かさ上げ、戸建・集合住宅組合せ案）

2. 下増田沿岸部のまち再建の事業方針（防災集団移転促進事業）

下増田沿岸部は、1次防御ライン（海岸堤防等）から2次防御ラインの間に位置し、今回規模の津波に対する安全対策を十分に行うことが困難であり、集団移転に対する地区住民の要望等もあることから、津波からの安全性の高い地域への防災集団移転促進事業による移転を行うことを基本に、引き続き検討を進めます。

移転先については、下増田地区全体の地域コミュニティを勘案し、同地区内での移転先を検討していきます。

●参考：沿岸部の土地利用イメージ

防災集団移転における集落跡地を含む沿岸部の土地利用イメージとして、次のような整備イメージが考えられます。

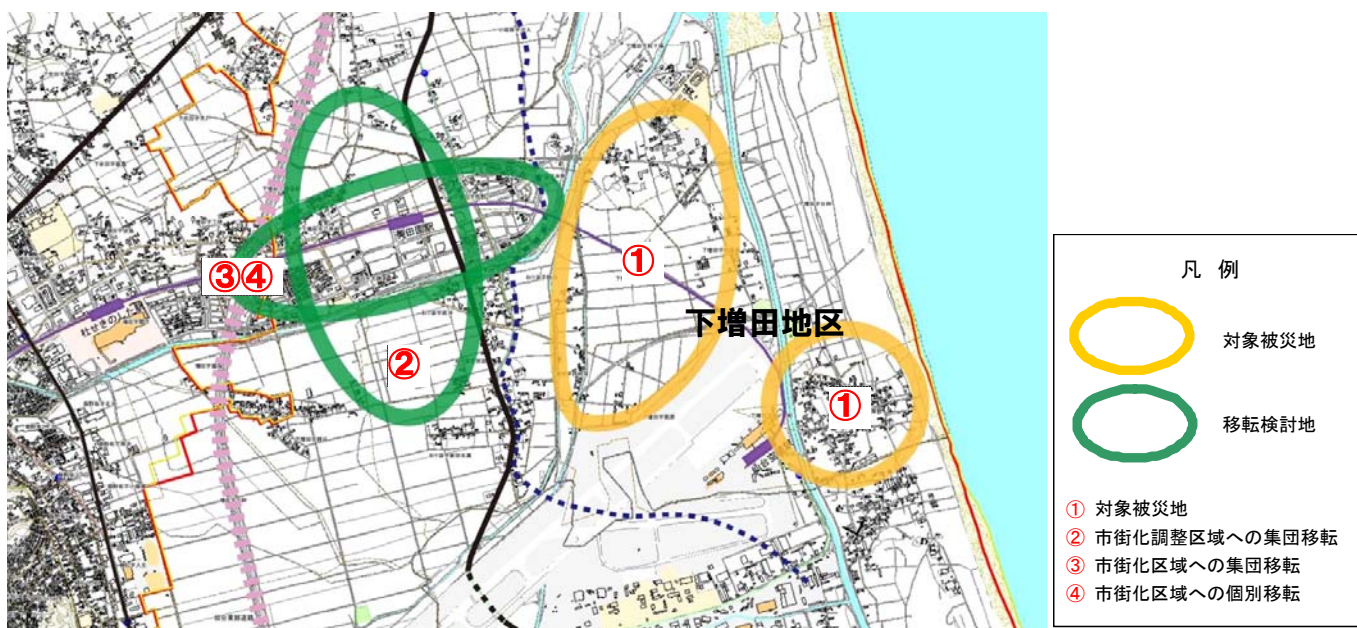
①2次防御ライン東側の土地利用イメージ

2次防御ライン東側の田園エリアでは、今回の地震による地盤沈下の問題や、集落の集団移転、県立農業高校の移転など、田園・集落地区としての再建が困難であると考えます。そのため、水と緑など地区の持つ地域資源を生かした自然活用型の交流ゾーンとしての活用や、新たな産業を誘導するエリアとして位置付けて、土地利用の展開を検討していきます。

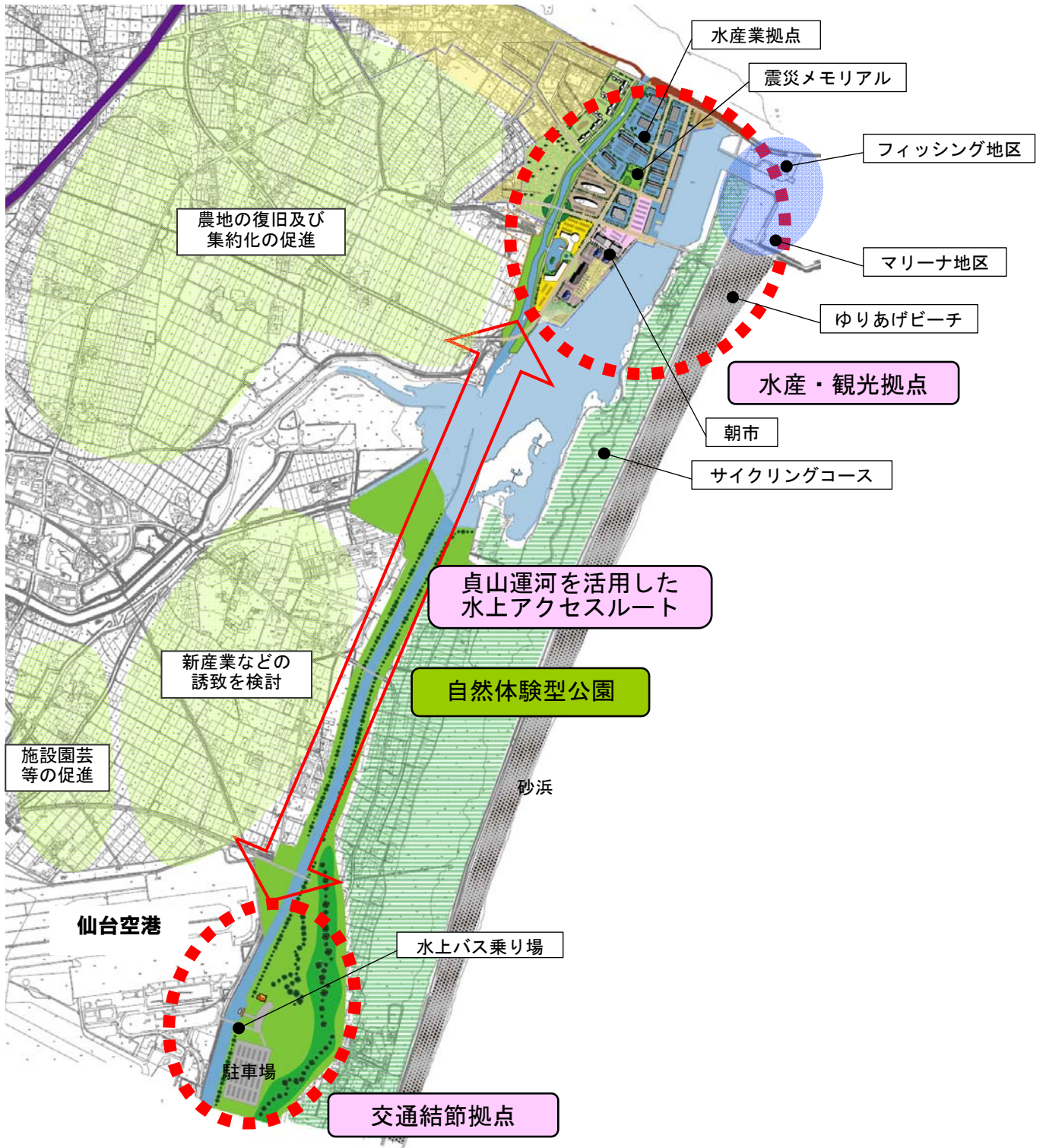
②田園・集落地区の土地利用イメージ

2次防御ライン西側の田園エリアには農家集落が点在しており、これらは主に自然堤防や砂州の微高地に建設されていますが、今回の津波による被害もあります。したがって、ニーズに対応して地盤の嵩上げや施設の耐浪化を施すなど、きめ細かな対策が必要だと考えられます。

また、2次防御ラインの整備に伴い内水氾濫などの課題もあるため、内水排水対策には十分な対策を講じていきます。



図：下増田地区沿岸部の土地利用イメージ



図：沿岸部の土地利用イメージ図

第5章

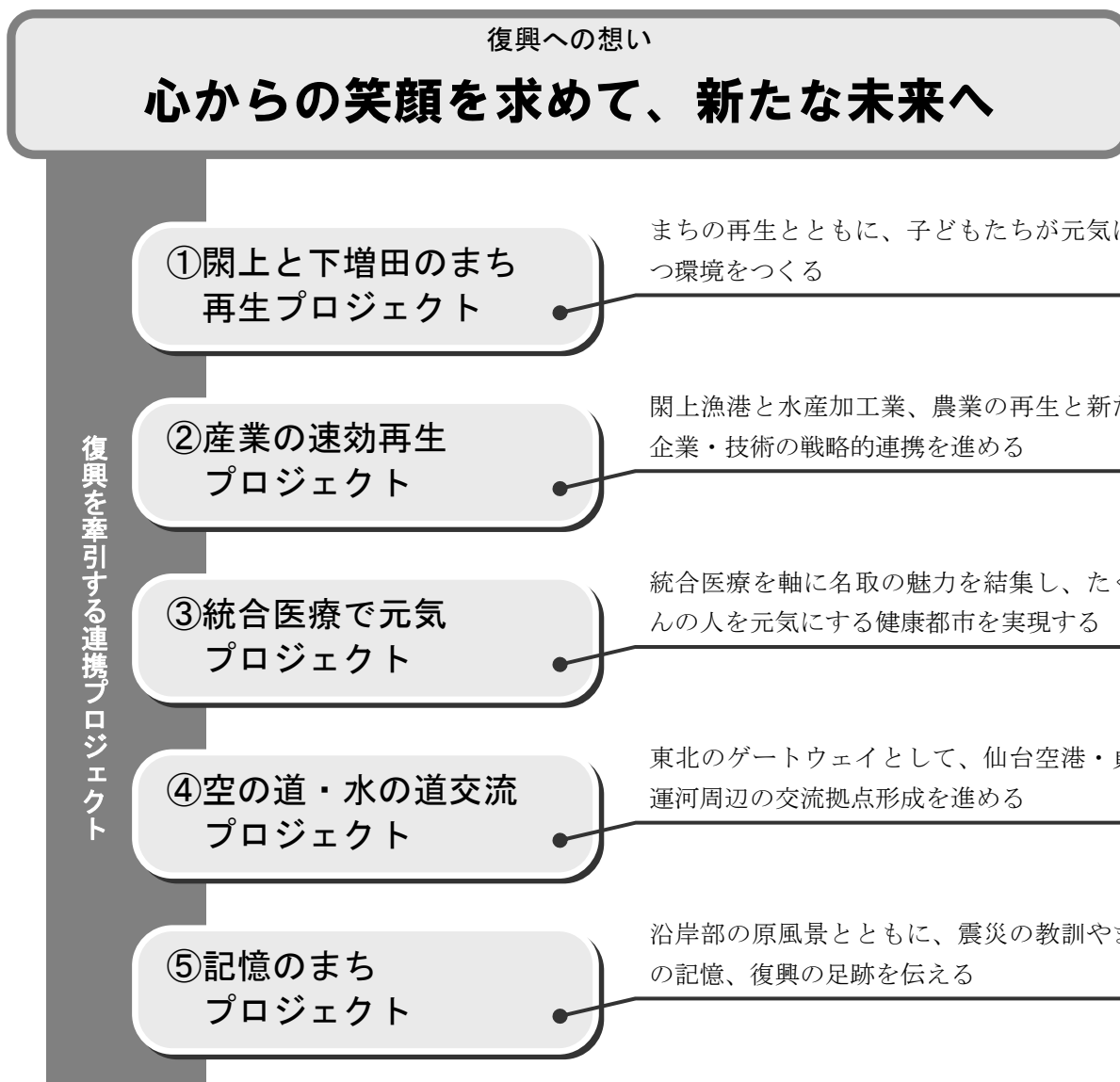
復興を牽引する連携プロジェクト

復興への想いと3つの目標（暮らし・産業・まち）の実現に向けて、本市の復興を牽引するプロジェクトを定めました。

これは、未来へと希望をつなぐ名取の魅力の再生・復興について、相互補完により、目に見える効果として復興の進捗が実感できる取り組みをパッケージ化したものです。

このプロジェクトは、市が取り組むべき施策・事業の分野横断的な連携や、市民・事業者の方々など、名取の復興を支える全ての人々との連携によって、効果的な取り組みを進めていくための指針となるものです。

また、壊滅的な被害を受けた沿岸地域以外に暮らす市民や、近郊の住民にとっても魅力ある取り組みを進め、相互の交流によって、名取市全体の活力を高めていきます。



復興を牽引する連携プロジェクト①

関上と下増田のまち再生プロジェクト

● ねらい

まちの再生とともに、子どもたちが元気に育つ環境をつくる

みんなで考える
新しい
まちづくり

コミュニティ
の確かな絆
が感じられる
まちの再生

住み続けたい
魅力ある
まち

沿岸部の復興に向けて、関上地区では現位置再建のための被災市街地復興土地区画整理事業を推進し、公民館を核にコミュニティを再生していきます。下増田地区では、防災集団移転促進事業を推進していきます。

関上地区では、子どもをはじめ多様な世代が安心して過ごし、互いに見守り、関わり合える絆を感じるコミュニティを形成するため、まとまったエリアで学校・公民館・子育て支援施設・消防署・公園等を再建します。下増田地区における集団移転に際しても、コミュニティの維持や既成市街地の活用を通じて、安全・快適な生活空間の創出を進めていきます。また、地域防災や安全対策と並行して、子どもたちが元気に遊べる場所を増やし、震災のつらい体験から心を解放し、いきいきとした笑顔で暮らせる環境づくりを進めます。

新たなエネルギー利用環境、まちの安全・利便性をトータルに管理する地域情報ネットワークなど、次代を見据えて、住み続けたいと感じるまちの魅力を創出していきます。

● 中心的な取り組み（主要施策）

再生期	◇関上・下増田のまちの復興に向けた事業の推進（関上地区：被災市街地復興土地区画整理事業、下増田地区：防災集団移転促進事業）	まち
	◇恒久的な住宅への移行支援 （住宅再建支援、被災地区における災害公営住宅整備等）	暮らし
	◇地区の復興を先導する公共施設の整備 （コミュニティの拠点となる学校・公民館等の再整備）	まち
	◇防災性の高いまちづくりの推進 （地域防災計画、津波被害地区の宅地嵩上げ補助等）	まち
	◇復興に向けた協働のまちづくりの推進 （公民館を核としたコミュニティの再生、復興まちづくりを担う地域住民組織の支援）	暮らし
	◇地域への愛着を育てる教育と将来を担う人材の育成 （子どもたちの海と陸（おか）の体験・遊びの場づくり）	暮らし
展開期 ～発展期	◇生命を守る避難・救援のネットワーク形成	まち
	◇日常生活の魅力を高める環境づくり （次代の居住スタイルに対応した住宅地・商業地）	まち

復興を牽引する連携プロジェクト②

産業の速効再生 プロジェクト

● ねらい

閑上漁港と水産加工業、農業の再生と新たな企業・技術の戦略的連携を進める

小規模でも、
できるところ
から復興

沿岸部の農地や閑上漁港とともに、全国屈指の味と品質のアカガイ、笹蒲鉾、東北有数の出荷量を誇るカーネーションなどの農水産物や加工品の生産基盤や交通インフラについて、仮設や暫定、小規模でも、必要な安全対策を施しながら、できるところから早期に復興し、内外にアピールしていきます。

拠点化・集約化
による地域
ブランドの確立

沿岸部で大区画ほ場整備や農地の利用集積等により農業の振興を図るとともに、閑上漁港において世界基準の品質管理が可能な市場の導入を進めるなど、仙南地域における拠点港としての機能強化を図り、漁業・水産加工業の振興を図ります。また、震災後いち早く再開したゆりあげ港朝市などを中心に近郊からの集客力を高め、農水産物を生かした“食”の交流を通じて、新たな地域ブランドが生まれるよう環境づくりを進めていきます。

新産業の創造、
企業集積
による
雇用の創出

新たな技術・商品やサービスにより、既存の地域産業との連携によって、新たな価値・ブランドの創造が進むよう、戦略的な企業立地や起業を促進し、さらなる企業集積や雇用の創出が進む好循環をつくっていくことを目指します。

● 中心的な取り組み（主要施策）

再生期	◇閑上漁港の復旧と漁業・水産加工施設の再建支援 (閑上漁港・共同利用施設の復旧、水産加工場の仮設整備、防浪施設等整備への支援)	産業
	◇農業再開への支援 (園芸農業施設の復旧支援、大区画ほ場整備の推進等)	産業
	◇農地の集約と持続的な農業経営体制づくり	産業
	◇戦略的な企業誘致と産業振興支援 (ビジネスプランの公募と支援、産業を担う若い人材の育成)	産業
展開期 ～発展期	◇世界に通用する品質管理による漁業・水産加工業の集積促進 (仙南の拠点港としての機能集約の戦略、仙台空港を活用した輸出産業の展開等)	産業
	◇全国をターゲットにした地域ブランドと観光の充実 (農水産物、加工品を生かしたブランディング戦略) (朝市や中心市街地の賑わいイベント等と連携した特産品の開発と販路拡大)	産業
	◇中心市街地活性化事業の推進	まち

復興を牽引する連携プロジェクト③

統合医療※で元気 プロジェクト

● ねらい

統合医療を軸に名取の魅力を結集し、たくさんの人を元気にする健康都市を実現する

たくさんの人
を元気にする
統合医療

震災後、わたしたちの暮らしや健康を多くの支援活動により支えていただきました。復興のシンボルとして、統合医療の誘致に取り組み、より効果的に被災者の心身のケアに取り組める環境づくりを進めるとともに、多くの人々が訪れ、心身のケアができる拠点都市を目指します。

統合医療を
中心に充実する
ヘルスケア
機能

特区制度の活用を視野に入れて、統合医療センターを中心に、がん・難病治療機能の充実、医療・保健と介護・福祉の統合、これらを支える研究や教育機能の導入、国際的な支援・協力体制の構築を進め、東北を代表するヘルスケアシティを目指します。

高齢社会の
トップランナー
を目指す
健康都市づくり

健康・医療・スポーツをテーマとした国際交流や自然や風土、食を生産する産業（農業・漁業・水産加工業など）の力を結集させ、食やスポーツによる健康づくり、新たな技術やサービス・商品等の開発を進め、「医食同源」による市民の健康と名取の元気づくりを図っていきます。このような名取の風土に親しみながら健康的に暮らせるライフスタイルの魅力を全国に発信していきます。

● 中心的な取り組み（主要施策）

再生期	◇特区制度を活用した統合医療センターの誘致 (特区制度の活用、統合医療やがん治療の誘致、医療・介護の連携、疾病予防と健康づくり、人材育成と研究機能の誘致等)	暮らし
	◇心と体のきめ細かなケア (被災者のメンタルヘルスケア、健康相談、自然を生かして心身を癒せる空間、医療・健康のツーリズム等)	暮らし
	◇地域産業イノベーションの推進 (漁業・水産加工業・農業の連携で健康志向の食の開発と提供、海洋資源やその含有物質の新たな活用等)	産業
	◇戦略的な企業誘致と産業振興支援 (医療・健康、介護・福祉等の関連産業の振興)	産業
展開期 ～発展期	◇自然や歴史遺産等を生かした観光・交流の促進 (海のスポーツ・アクティビティの充実、ヘルスケアのツーリズムの活性化等)	産業
	◇日常生活の魅力を高める環境づくり (日常的な健康づくりのニーズや介護・福祉サービスと連動した居住環境の充実)	まち

※統合医療：西洋医学による医療と伝統医学（漢方薬、鍼灸、指圧等）、補完代替医療（音楽療法、アロマセラピー等）などをあわせて治療すること。

復興を牽引する連携プロジェクト④

空の道・水の道交流 プロジェクト

● ねらい

東北のゲートウェイとして、仙台空港・貞山運河周辺の交流拠点形成を進める

東北の観光・交流のゲートウェイとしての戦略的ビジョン

東北の広域的な観光・交流圏のゲートウェイ、国際的な交流拠点としての仙台空港周辺の可能性を分析したうえで、貞山運河や広浦及びその周辺、閑上漁港、ゆりあげビーチなどの地域資源を生かした沿岸部活性化の戦略的なビジョンを検討し、民間投資などの多様な力が生かせる環境づくりを進めます。

貞山運河・広浦を中心として空と水辺をつなぐ観光軸

仙台空港を起点として、海浜、貞山運河、広浦などの名取らしい風景と歴史遺産、閑上地区の復興に伴って充実させていく水産・観光の拠点機能を連携させるとともに、空と水辺をつなぐ“道”と観光軸を形成していきます。

空港を起点として活発になる国際観光・交流

海外や全国をターゲットにして、東北圏の地域情報や旅に関わる様々なサービスが充実したゲートウェイ機能や、宿泊、健康・リラクゼーション、海の学習・研究・交流施設など、仙台空港を利用する多くの人々が名取を目的として訪れ、充実した時間を過ごすことのできる観光・交流機能を充実させていくため、民間の事業活動の条件整備や支援等を行ってきます。

● 中心的な取り組み（主要施策）

再生期	◇全国をターゲットにした地域ブランドと観光の充実	産業
	◇戦略的な企業誘致と産業振興支援	産業
展開期 ～発展期	◇自然や歴史遺産等を生かした観光・交流の促進 (沿岸地域活性化振興ビジョンの策定等)	産業
	◇仙台空港と閑上を結ぶ観光軸の形成	産業
	◇都市の持続的な活力を育てる土地利用の展開 (貞山運河・広浦周辺等)	まち

復興を牽引する連携プロジェクト⑤

記憶のまち プロジェクト

● ねらい

沿岸部の原風景とともに、震災の教訓やまちの記憶、復興の足跡を伝える

市民みんなの
力で再生する
沿岸部の原風景

沿岸部の原風景とも言える海浜や防潮林、広浦、貞山運河、増田川などの豊かな自然や歴史遺産は、市民がみんなで、一本一本の木を植えるように復興への想いを込めて、防災機能の強化と一体的な再生を進めていきます。

体験・教訓、
記憶の中のまち
の断片を集め
語り継ぐ交流

津波の体験、追悼の想い、震災前にあった暮らしや風景、まちの記憶を風化させることなく、後世に語り継いでいくとともに、復興の足跡や震災の教訓についての学習と啓発を通じて、災害・防災をテーマとした新たな交流を進めていきます。

災害の正しい
知識と生命を
守る避難行動
を地域に定着

津波をはじめとして、様々な自然災害に対する正しい知識と避難の方法を定着させて、想定外の事態でも、生命を守ることのできる地域コミュニティの力を育て、高めていきます。

● 中心的な取り組み（主要施策）

再生期	◇震災の教訓の蓄積と定着化 (復興アーカイブズの蓄積、震災メモリアル施設等)	暮らし
	◇被災した地域資源の再生 (海浜や防潮林、祭、広浦・貞山運河等) (自然環境保護・再生に向けた市民活動の支援等)	産業
	◇震災によって生まれた交流や追悼の想いを広げる取り組みの実施 (ボランティア等をきっかけとした幅広い観光・交流、イベント・交流 機会の拡大等)	産業
	◇防災意識の向上と地域防災力の強化 (学校から地区へ広がる防災・減災教育等)	暮らし
展開期 ～発展期	◇閑上・下増田のまちの復興に向けた事業の推進 (震災・津波被害を後世に伝える公園の整備等)	まち
	◇日常生活の魅力を高める環境づくり (まちの面影や愛着を感じる街並み形成等)	まち

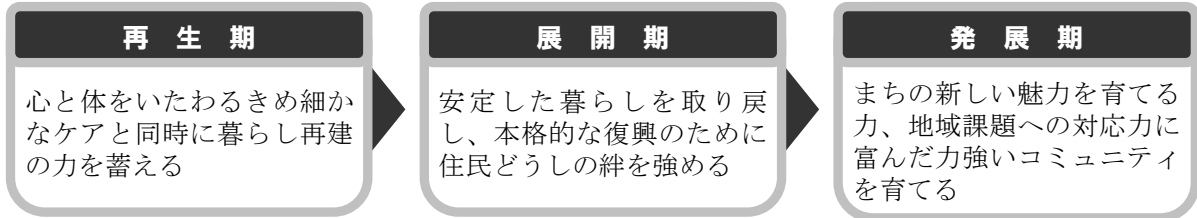
第6章 復興への取り組み

復興に向けて、「暮らし」「産業」「まち」の分野別の取り組みを効果的かつ実効あるものとするために、施策の方向及び主要施策を体系的に整理しました。

各主要施策は、「復興を牽引する連携プロジェクト」の取り組みを網羅するよう整合を図るとともに、再生期から展開期・発展期へと復興の取り組みをステップアップさせていくことを前提にしています。

1. 暮らし

●再生から展開・発展へのステップアップのイメージ



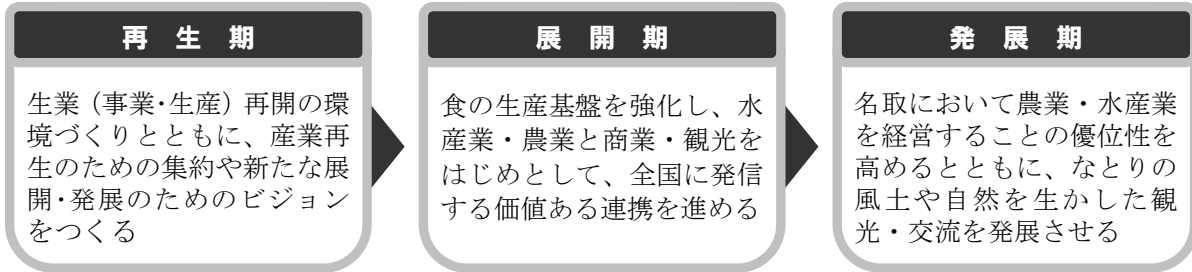
● 施策の体系 ●

◎：重点的な取り組み時期、○：取り組み時期

施策の方向	主要施策	取り組み時期			主な 施策分野
		再生期	展開期	発展期	
(1) 暮らしと住宅 の再建支援	1) 暮らし再建の相談と支援	◎			・住宅供給 ・生活再建
	2) 恒久的な住宅への移行支援	◎	◎	○	
(2) 心身のケアと 未来を支える 人づくり	1) 心と体のきめ細かなケア	◎	◎	◎	・健康づくり ・保健医療 ・高齢者福祉 ・障がい者福祉 ・学校教育 ・教育環境 ・地域の教育力 ・歴史・文化
	2) 特区制度を活用した統合医療 センターの誘致	◎	◎	◎	
	3) 学びと成長の環境整備と就学 支援	◎	○	○	
	4) 地域への愛着を育てる教育と 将来を担う人材の育成	◎	◎	○	
(3) コミュニティ を支える地域 力の醸成	1) 地域集会所の復旧	◎	○		・地域情報 ・地域防災力 ・コミュニティ ・協働
	2) 震災の教訓の蓄積と定着化	◎	○	○	
	3) 防災意識の向上と地域防災力 の強化	◎	○	○	
	4) 復興に向けた協働のまちづく りの推進	◎	○	○	
	5) 新たな社会的課題にチャレン ジするまちづくり活動の育成	○	◎	◎	

2. 産業

●再生から展開・発展へのステップアップのイメージ



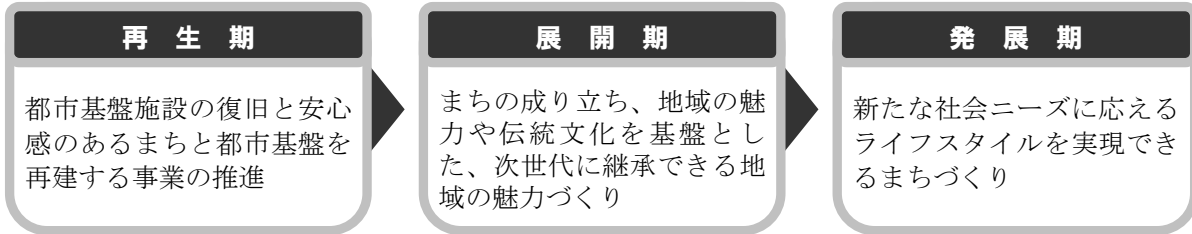
● 施策の体系 ●

◎：重点的な取り組み時期、○：取り組み時期

施策の方向	主要施策	取り組み時期			主な施策分野
		再生期	展開期	発展期	
(1) 地域に根付いた産業の再生と強化	1) 農業再開への支援	◎	◎	○	・農業 ・水産業 ・商工業
	2) 農地の集約と持続的な農業経営体制づくり	◎	◎	○	
	3) 閉上漁港の復旧と漁業・水産加工施設の再建支援	◎			
	4) 世界に通用する品質管理による漁業・水産加工業の集積促進	◎	◎	○	
	5) 商工業・中小企業の事業展開への支援	◎	○		
(2) 時代を先取りする企業誘致と雇用の創出	1) 地域産業イノベーションの推進	◎	○		・戦略的な企業誘致
	2) 戦略的な企業誘致と産業振興支援	◎	◎	○	
(3) なとりらしい風土を感じるブランドの確立と観光・交流の推進	1) 全国をターゲットにした地域ブランドと観光の充実	◎	◎	◎	・地域ブランド ・販路 ・観光 ・自然環境 ・交流 ・シティセールス
	2) 被災した地域資源の再生	◎	○	○	
	3) 自然や歴史遺産等を生かした観光・交流の促進	◎	◎	○	
	4) 震災によって生まれた交流や追悼の想いを広げる取り組みの実施	◎	○	○	
	5) 仙台空港と閉上を結ぶ観光軸の形成		○	◎	

3. まち

●再生から展開・発展へのステップアップのイメージ



● 施策の体系 ●

◎：重点的な取り組み時期、○：取り組み時期

施策の方向	主要施策	取り組み時期			主な 施策分野
		再生期	展開期	発展期	
(1) 災害に強い 都市空間の 創造	1) 災害等廃棄物の処理と適正な活用	◎	○		<ul style="list-style-type: none"> ・災害に強い都市空間 ・交通体系 ・上・下水道 ・公園
	2) 公共公益施設・都市基盤施設等の復旧	◎	○		
	3) 消防防災施設等の復旧・充実	◎	◎	○	
	4) まちを守る沿岸部の総合的な安全対策	◎	○	○	
	5) 防災性の高いまちづくりの推進	◎	○	○	
	6) 生命を守る避難・救援のネットワーク形成	◎	◎		
	7) 災害に強いライフラインの構築	◎	◎	○	
(2) 復興を支え、 元気を育てる 土地利用の 推進	1) 閑上・下増田のまちの復興に向けた事業の推進	◎	○		<ul style="list-style-type: none"> ・快適な市街地 ・憩いの空間
	2) 都市の持続的な活力を育てる土地利用の展開	○	◎	○	
(3) 魅力ある市街 地の形成	1) 地区の復興を先導する公共施設の整備	◎			<ul style="list-style-type: none"> ・地域特性を生かしたまちづくり ・地球温暖化対策
	2) 日常生活の魅力を高める環境づくり		◎	○	
	3) 中心市街地活性化事業の推進	○	◎	○	
	4) 多様な世代や多彩な人材の定住促進		◎	○	
	5) 賢いエネルギー活用の促進		○	◎	

資料編

名取市内の被災状況等

連携プロジェクト検討経過のアイデア

名取市内の被災状況等

①人的被害の状況

今回の震災は、市内各地に甚大な被害をもたらしましたが、特に、沿岸部の閑上地区と下増田地区においては、津波による壊滅的な被害を受けており、人的な被害も多く出ています。

また、震災直後（3月12日現在）には10,715人が避難所に身を寄せ、震災から約2ヶ月が経過した5月16日現在でも905人の方々が避難所での生活を強いられていました。応急仮設住宅の建設により、6月22日には全ての避難所を閉鎖しましたが、現在でも仮設住宅などで多くの方々が何かと制約の多い生活を余儀なくされています。

表：名取市の被害状況と避難の状況

	3月12日 現在	5月16日 現在	8月22日 現在	備 考
遺体収容数	—	901体	911体	名取市内での遺体収容数
	—	792体	872体	遺族引渡し遺体数
	—	731体	805体	遺族引渡し遺体のうちの名取市民の遺体数
不明者数	—	148人	76人	
避難所数	52箇所	9箇所	0箇所	
避難者数	11,223人	905人	0人	市民以外も含む

※名取市作成

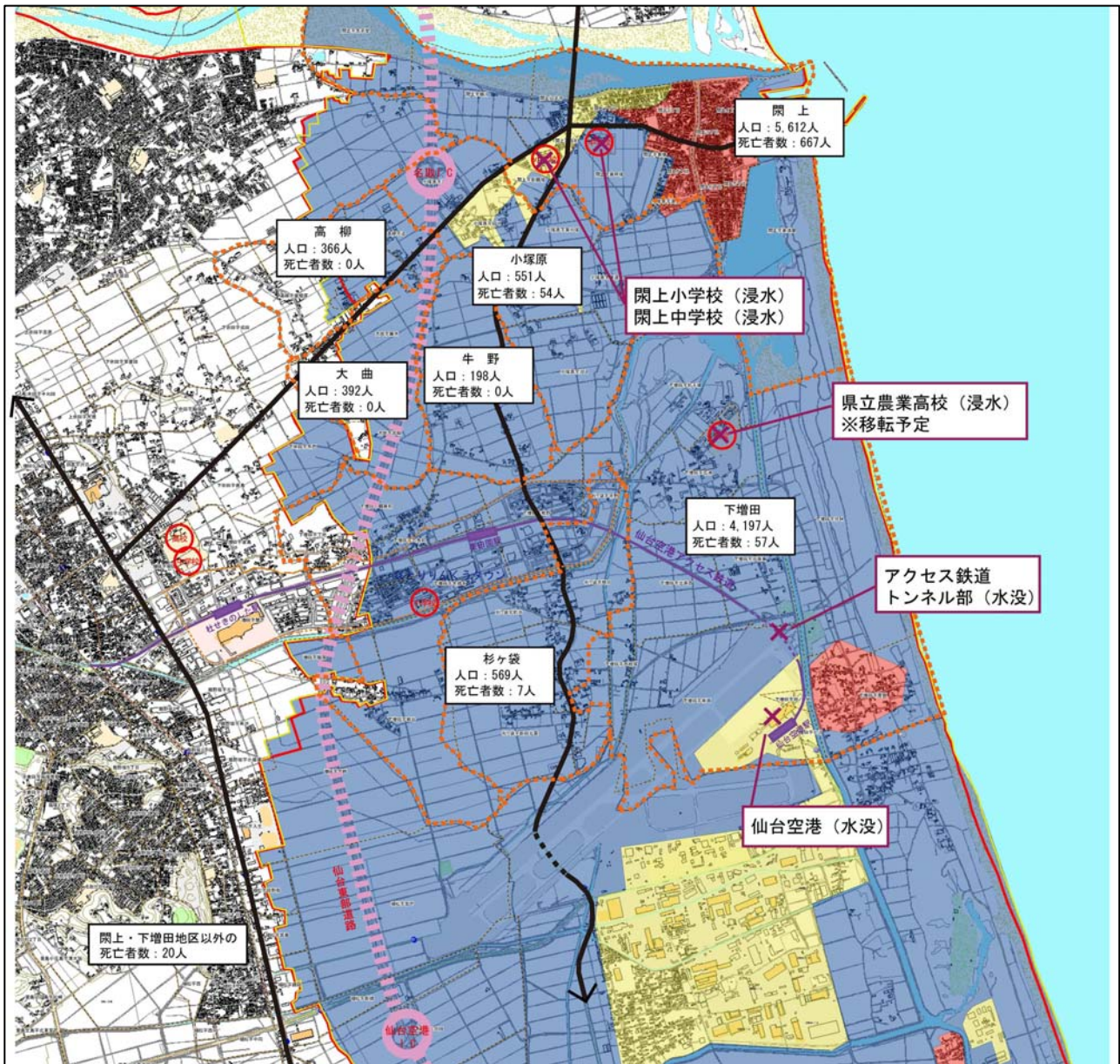
※名取市外において収容された市民遺体収容数59人（警察発表分）は、含まれていない。

表：名取市における応急仮設住宅の建設状況

名称	建設場所	1DK	2DK	2K	3K	合計(戸)	着工
箱塚桜	箱塚一丁目12	21	60		21	102	H23. 3. 28 完成
箱塚屋敷	手倉田字箱塚屋敷	24	54		24	102	H23. 4. 5 完成
同 上	同 上	12	54		12	78	H23. 4. 13 完成
美田園第一	下増田字前田		128			128	H23. 4. 13 完成
美田園第二	下増田字飯塚		120			120	H23. 4. 13 完成
愛島東部	愛島笠島字		182			182	H23. 4. 20 完成
美田園第三	下増田字土手北		27			27	H23. 4. 20 完成
植松入生	植松字入生		150			150	H23. 5. 27 完成
雇用促進住宅 愛島宿舎	名取が丘六丁目7			196		196	完成
合 計		57	775	196	57	1,085	

※住戸タイプ：1DK（6坪）、2DK（9坪）、3K（12坪）

※平成23年7月9日 現在



凡例

地区名
 人口：(平成23年2月末人口) ※1
 死者数：(平成23年8月22日) ※2

- 浸水区域※3
- 主に損壊家屋が多い区域
- 流失家屋の多い区域

※1：人口は名取市住民基本台帳
 ※2：死者数は、遺族に引き渡した遺体の住民登録別に区分
 ※3：国土地理院発表による浸水区域

図：東北地方太平洋沖地震による浸水区域と人的被害

②家屋等の被害状況

市内では、罹災証明交付件数が3万件を超え、住宅11,889棟、非住宅2,419棟の家屋が被害を受けました。

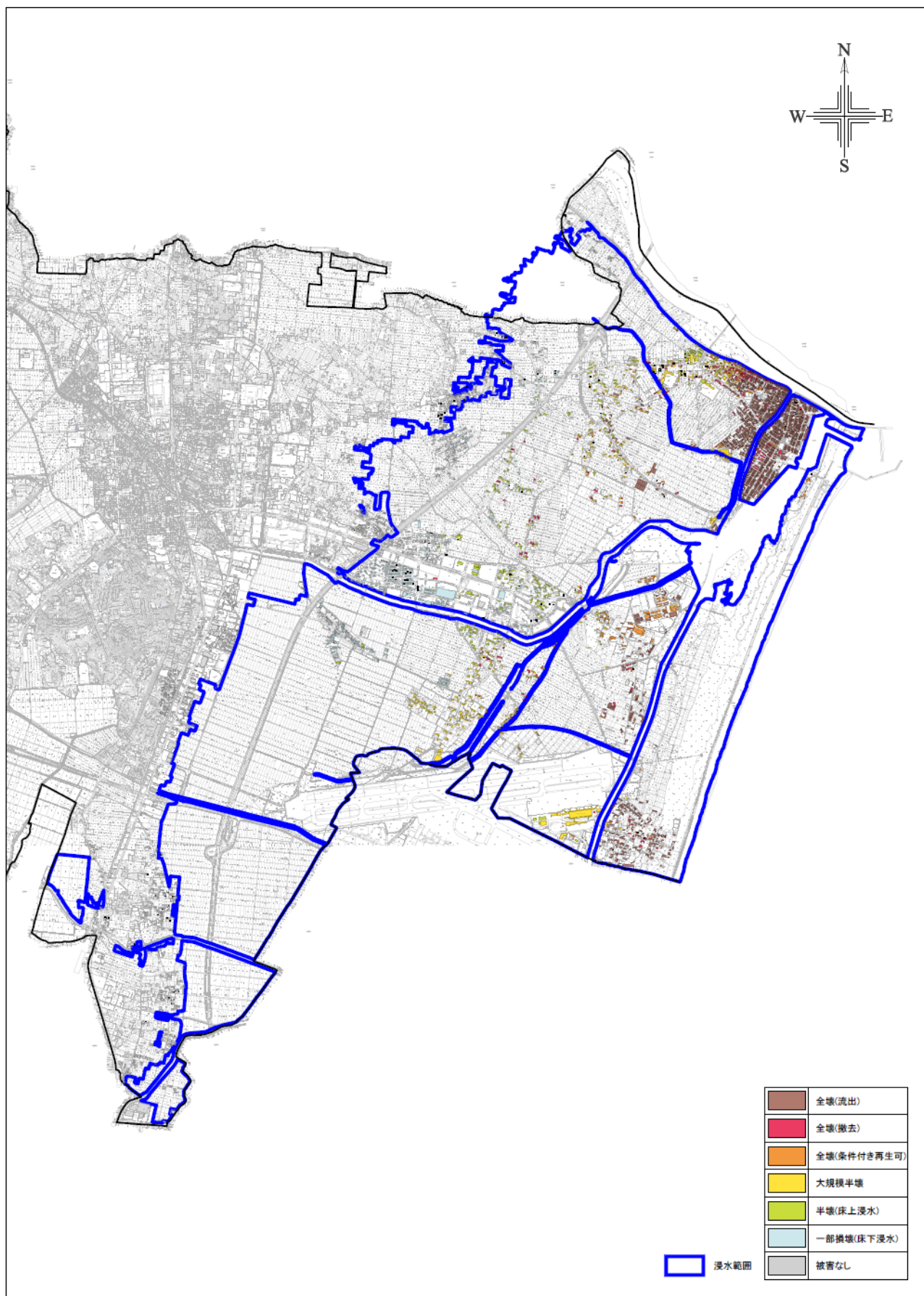
なかでも、閑上1～7丁目（市街化区域）や、北釜地区をはじめとする下増田地区の増田川以東のエリア、小塚原の集落などの沿岸部では、家屋の全壊（流出・撤去）が多数を占め、火災も発生するなど、津波によって甚大な被害を受けました。

内陸部においても、屋根瓦の崩落、外壁への亀裂、宅地の不等沈下、塀の倒壊などが見られ、被害は市内全域に及んでいます。

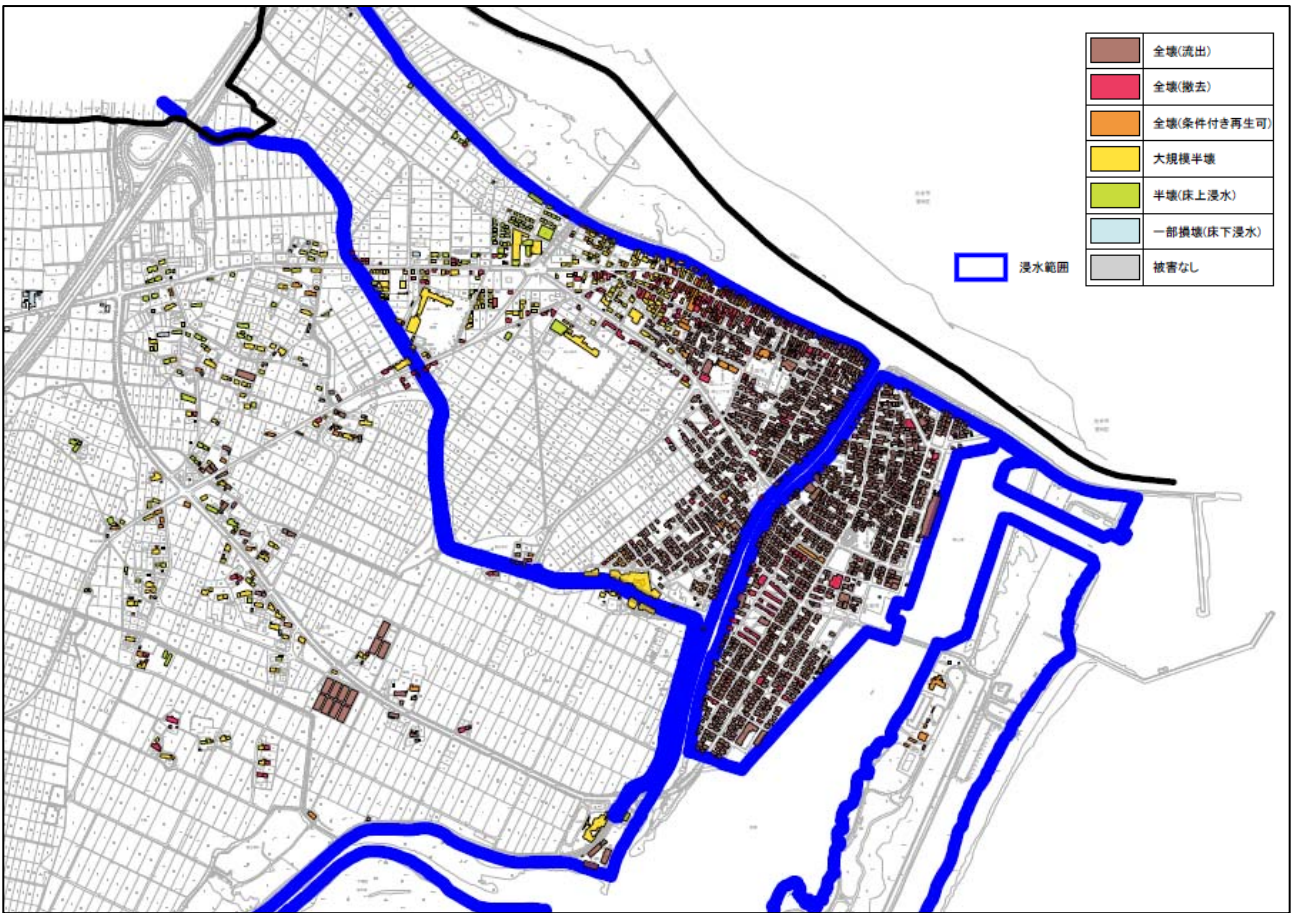
表：名取市内の家屋の被害状況（概略）

（平成23年8月19日現在）

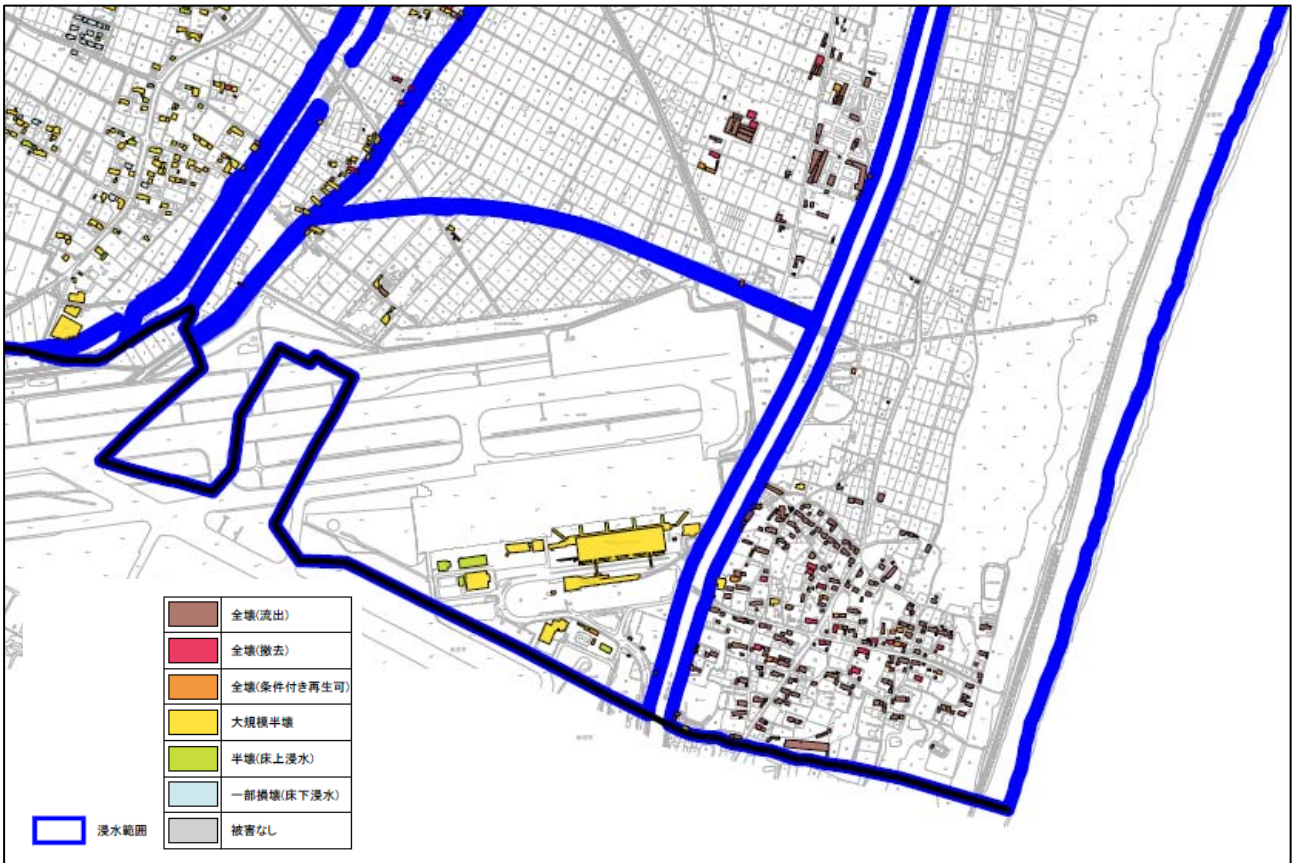
内 容			件 数	備 考
1	罹災証明 受付件数	一次調査	32,571 件	家屋等 ※罹災証明上の数値
		再調査	1,378 件	
2	罹災証明 交付件数	一次調査	31,874 件	家屋等 ※罹災証明上の数値
		再調査	1,166 件	
3	住宅被害 状況	全 壊	2,788 棟	
		大規模半壊	214 棟	
		半 壊	717 棟	
		一部破損	8,170 棟	
		合 計	11,889 棟	
4	非住宅 被害状況	全 壊	922 棟	
		大規模半壊	123 棟	
		半 壊	251 棟	
		一部破損	1,123 棟	
		合 計	2,419 棟	



図：家屋被害状況図（名取市内の津波の浸水範囲）



図：家屋被害状況図（名取市閑上地区周辺）



図：家屋被害状況図（名取市下増田地区周辺）

③各施設の被害状況

震災によって、都市基盤施設、公共施設、産業関連施設など、市民の暮らしや産業を支える施設が市内各地で大きな被害を受けました。

都市基盤施設では、道路が393箇所で沈下・陥没・亀裂・段差などが生じたほか、公園、上・下水道も被害を受けました。特に、下水道の被害額が大きくなっています。

公共施設では、市庁舎や名取駅の東西自由通路、幼稚園・小中学校等35施設など、市内全域にわたって被害が生じています。沿岸部では、市営住宅や保育所、斎場、消防施設など、多くの施設が津波の被害を受けています。

産業関連でも、漁港や漁協などの水産施設のほか、沿岸部の広大な田畑が津波によって大きな被害を受けました。排水機能の被害によって、浸水を免れた農地も作付けを控えざるを得ないなど、間接的な影響も大きくなっています。

表：名取市内の施設の被害状況

施設	概算被害額（千円）	被害の詳細
都市基盤施設		
道路（橋梁）	1,959,015	道路 393 箇所（沈下、陥没、亀裂、段差） 橋梁 7 箇所（下部構造亀裂）
公園	1,058,802	47 箇所（遊具、フェンス等損壊）
下水道	8,074,088	10 箇所（ポンプ場稼働停止、一部損壊）
上水道	181,876	530 件（本管、給水管漏水等）
公共施設等		
市営住宅	2,500,000	市営住宅 14 棟（109 戸、入居者 243 人）住宅全壊
庁舎	54,431	水道管破裂、外壁・議会棟天井破損等
都市施設	24,000	名取駅東西自由通路、名取駅コミュニティプラザ
福祉施設	581,950	閑上保育所、老人福祉センター全壊、 他 3 施設（躯体以外全壊、外構陥没・亀裂）
教育施設	2,498,100	幼稚園・小中学校等 35 施設（天井・壁落下等）
生活経済施設	1,682,353	斎場等 5 施設（外壁破損、天井落下）
消防施設	227,427	閑上出張所、消防団詰所車庫 8 棟等
その他施設	274,093	集会場 10 棟、緩衝緑地、防災行政無線損壊等
産業関連施設		
水産施設	6,268,200	閑上漁港事務所、県漁協閑上支所で津波被害
農業施設	46,320,400	田 1,407ha、畑 270ha、揚排水機場等
計	71,704,735	

※平成 23 年 6 月 27 日現在

④津波の浸水深（痕跡）調査結果

平成23年3月11日(金) 14時46分頃の地震発生から約1時間後には、本市の沿岸部に津波が到達し、6回程度の津波が押し寄せたものと目撃者の証言等から推定されています。

浸水深は、津波の痕跡から見て、関上漁港付近で6～8m、県道塩釜亘理線の東側付近（小塚原地内）で2m前後と推定されます。

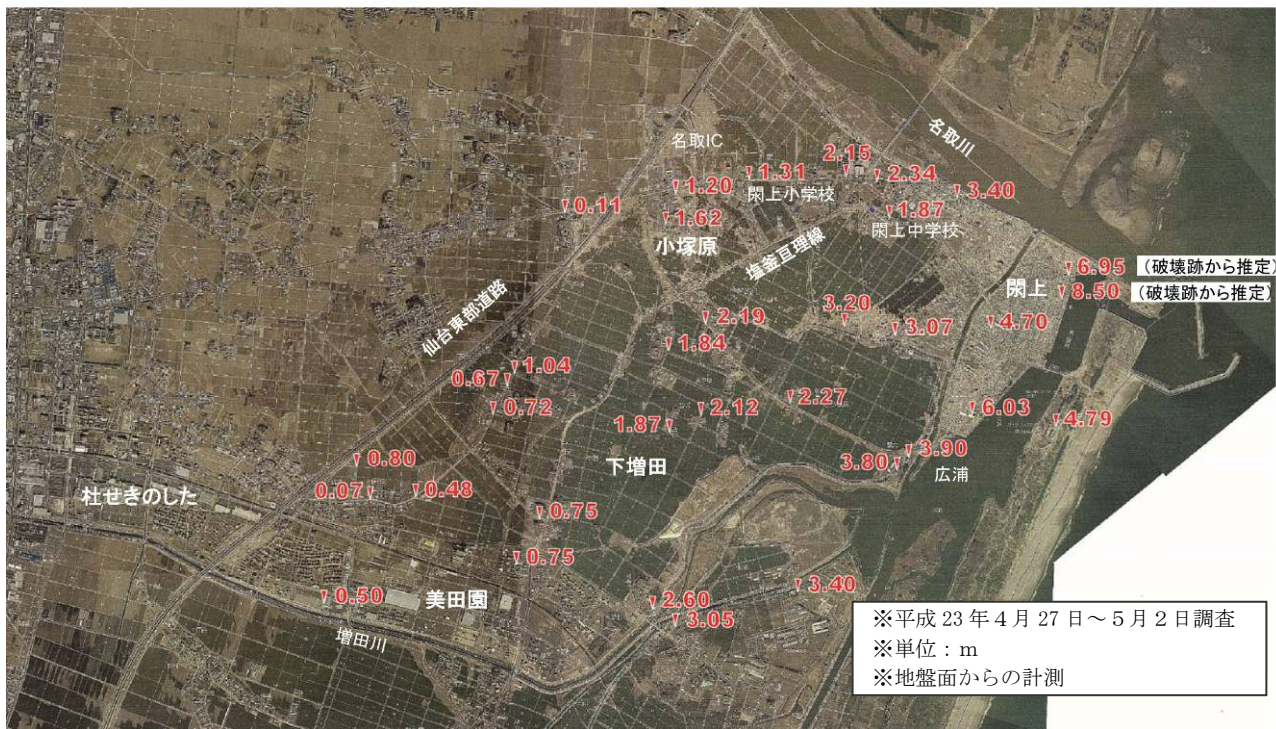
下増田地区では、北釜地区や広浦地区で、浸水深は3mを超えたものと推定されます。

表：津波の浸水深（津波痕跡調査）

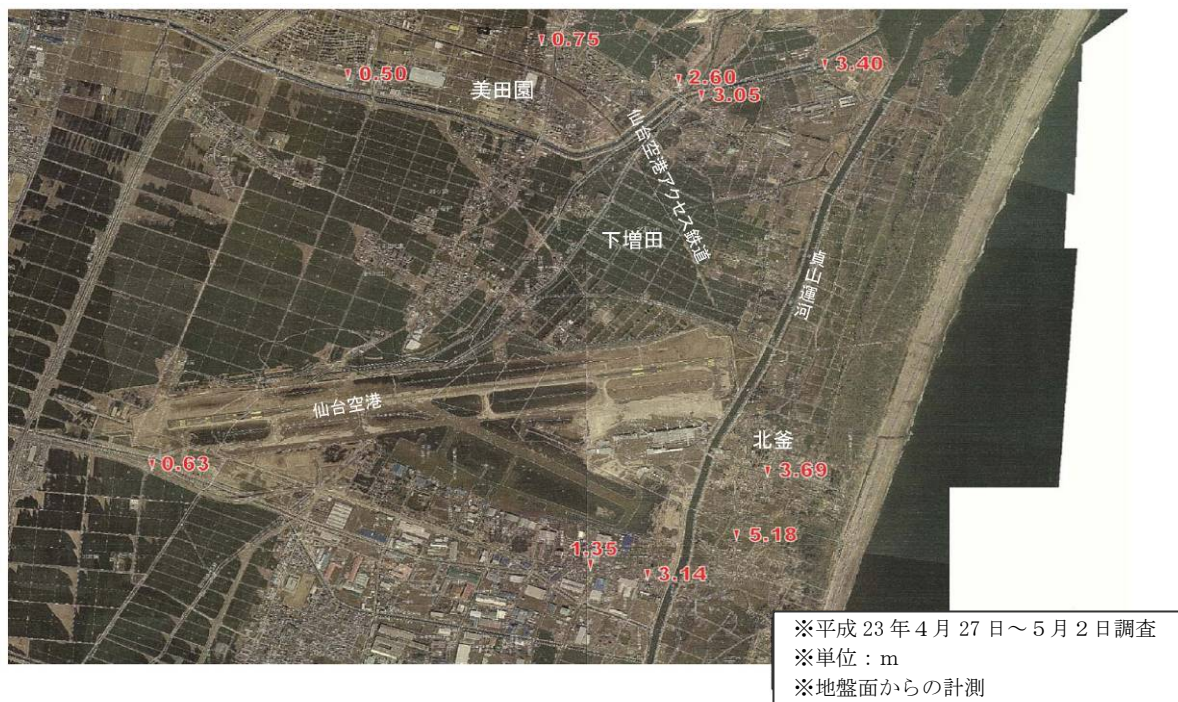
場 所	浸水深	備考
名取市サイクルスポーツセンター付近	4.79m	
関上漁港付近	6.95m、8.50m	破壊跡から推定
関上5丁目付近	6.03m	
関上6丁目付近	4.70m	
斎場付近	3.80m	
関上中学校付近	1.87m	
関上小学校付近	1.31m	
県道塩釜亘理線の東側付近	1.84m、2.19m	小塚原
名取IC付近	1.20m	
宮城県農業高等学校付近	3.40m	
北釜地区付近	3.69m	
下増田小学校付近	0.50m	

※地盤面からの計測

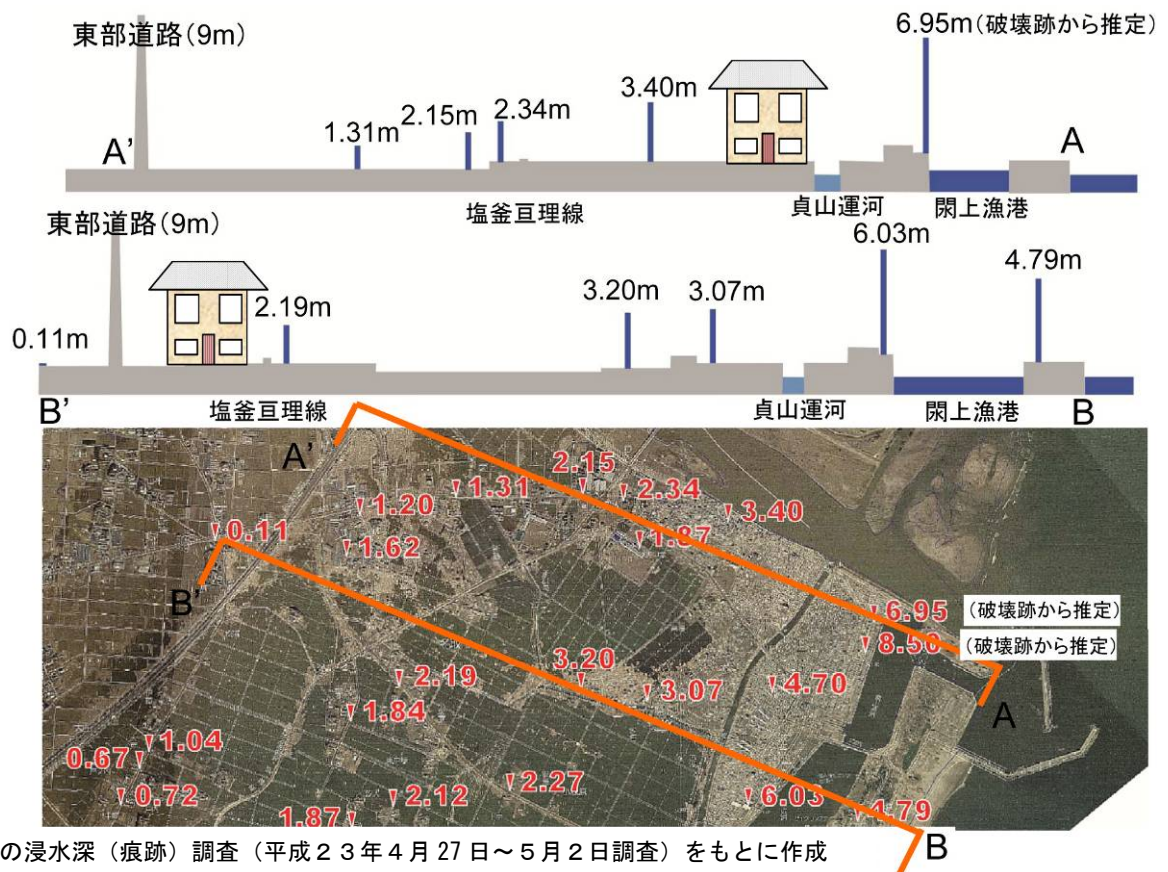
※平成23年4月27日～5月2日調査



図：津波の浸水深（名取市関上地区周辺）

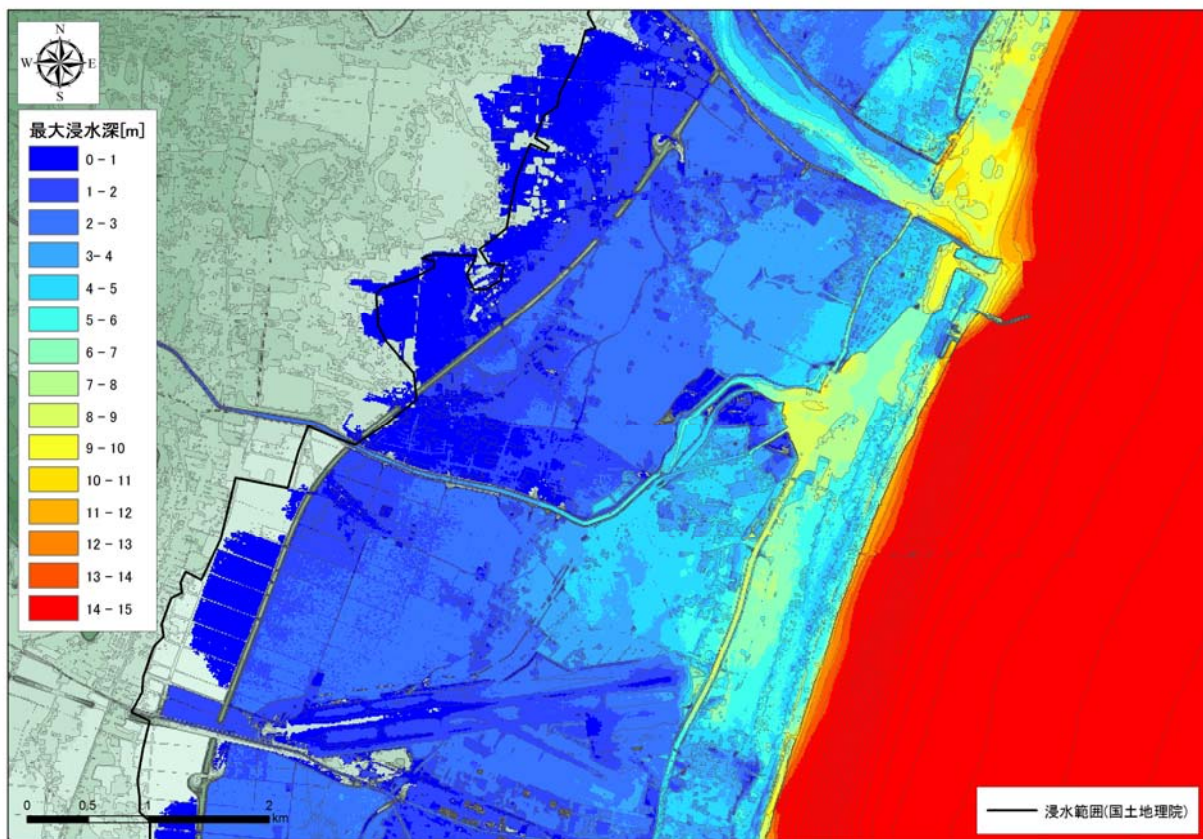


図：津波の浸水深（名取市下増田地区周辺）

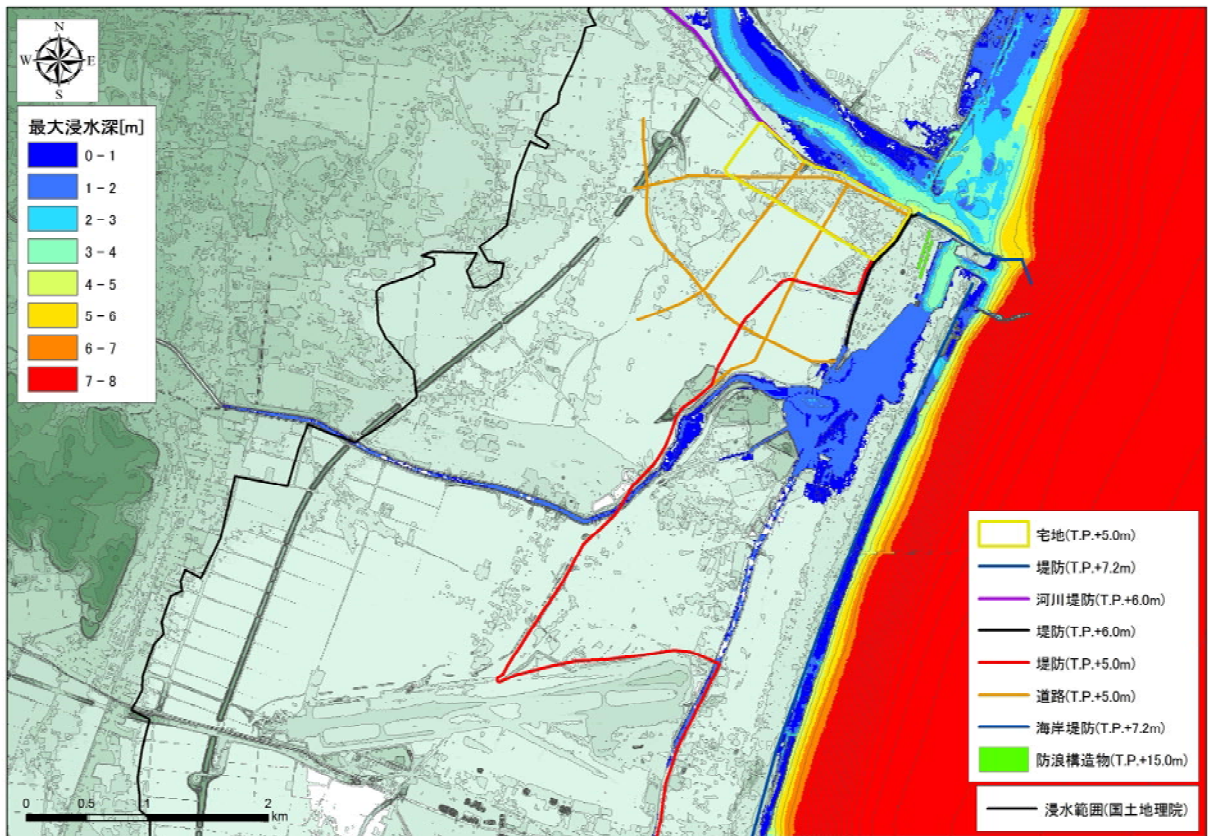


図：津波の浸水深（断面概略図）

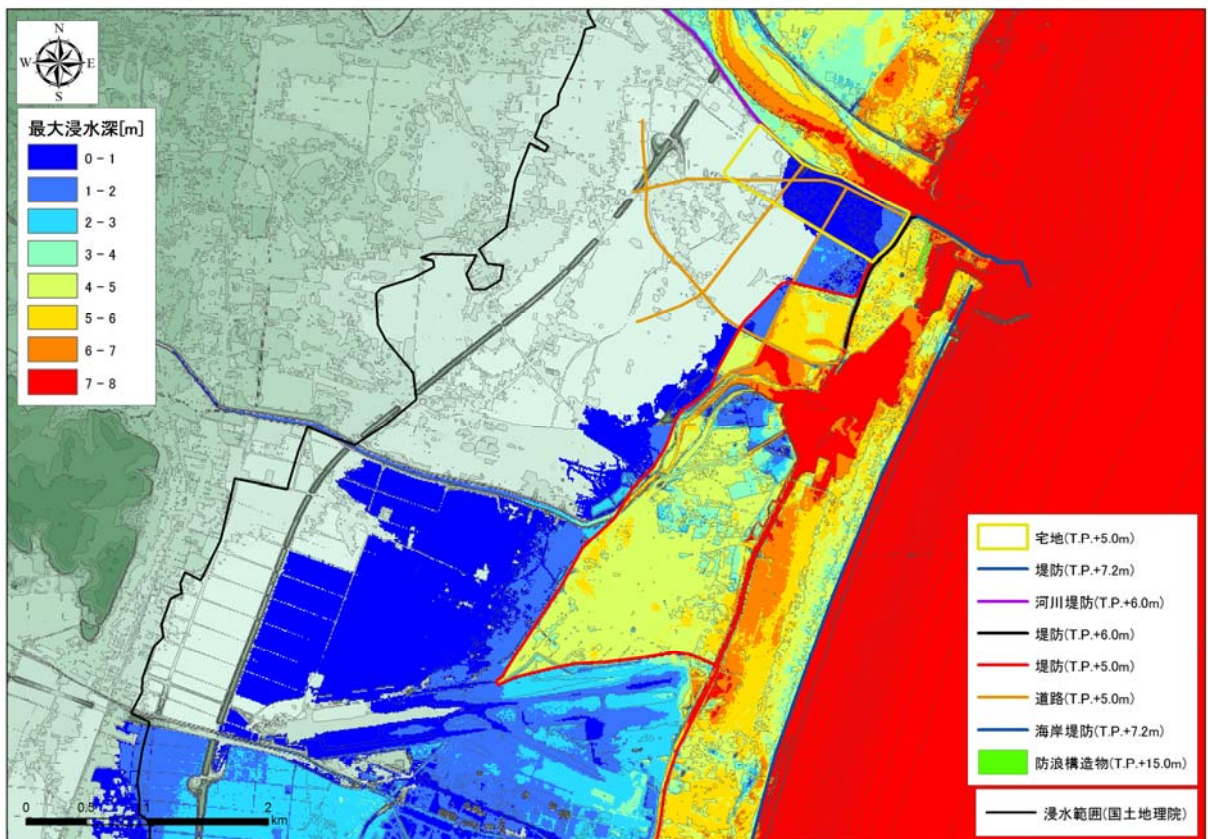
⑤津波シミュレーション結果



図：2011. 3. 11 の津波を再現したシミュレーション結果



図：C案における津波シミュレーション結(明治三陸沖(1896年)地震の津波を再現)
 津波防護レベル(レベル1相当)



図：C案における津波シミュレーション結(2011.3.11の津波を再現)
 津波減災レベル(レベル2相当)

連携プロジェクト検討経過のアイデア

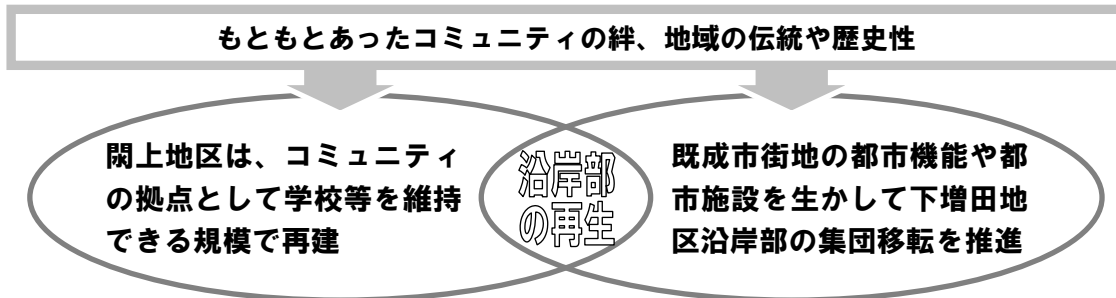
※ここに記載したアイデアは、連携プロジェクト検討にあたり、名取市新たな未来会議ワーキンググループにおいて整理されたものです。

※将来イメージや課題、市民・企業等に期待される役割は、連携プロジェクトを検討する段階での想定であり、プロジェクトの具体化の方策については、事業化の段階で検討されるものと想定しています。

連携プロジェクト検討経過のアイデア

① 関上と下増田のまち再生プロジェクト

● 連携プロジェクトが想定する将来イメージ



◇「想定外」の対応も想定する地域防災

津波に対する多重防御等、沿岸部の総合的な安全対策を講じた上で、「想定外」の事態や高齢者等の支援を要する住民の避難を想定した地域防災計画のもと、学校施設やコミュニティ施設や公園、避難場所・避難路等の配置を検証

◇「恐かった津波」「恵み豊かな海」の正しい知識を身につけ、学べる環境

子どもたちが海辺で、大人と交流しながら、いきいきと楽しめる遊び場をつくるとともに、津波と海の正しい知識を身につけ、海との絆を取り戻す学習・体験の機会を創出

◇子どもを見守り、多様な世代が関わり合うコミュニティの中心エリア

関上地区では、学校施設・公民館、子育て支援施設・消防署・公園等について、防災拠点としての一体的整備や一定のエリアでのまとまった再建も視野に入れた配置を検討

◇多様な世代の居住

持続的なコミュニティを形成するため、多様な世代の集住が可能な住宅再建・供給を推進・誘導

- ・災害公営住宅、市営住宅
- ・高質な集合住宅
- ・ケア付コレクティブハウス
- ・ファミリー用シェアハウス
- ・公的機能を併設する複合的な住宅 等

◇生活利便性

住宅再建にあわせて、子育て、医療・介護ケア、買物、公共交通など、日常生活の利便性を確保するサービス・機能を整備・誘致・運営

◇新たな居住の魅力

復興を通じて、近郊からの新しい居住を呼び込める魅力を創出

- ・次世代のエネルギー利用環境とライフライン
- ・地域サービスやエネルギー利用、防災等の情報ネットワーク 等

● 推進に向けた短期的な検討課題

- ◇復興に向けた地区の協議体制の構築と事業推進（復興の事業計画策定、調整、合意形成等）
- ◇復興まちづくりの情報発信とコミュニケーションの推進
- ◇コミュニティ復興のあり方を地区で考えて実行する計画策定と体制づくり
- ◇PFIや、公設民営、指定管理者制度など、公共公益施設の配置や公共サービスの提供、多様なタイプの住宅供給体制の構築
- ◇海辺の学習・体験・遊びの場の整備

など

● 市民・企業等に期待される役割

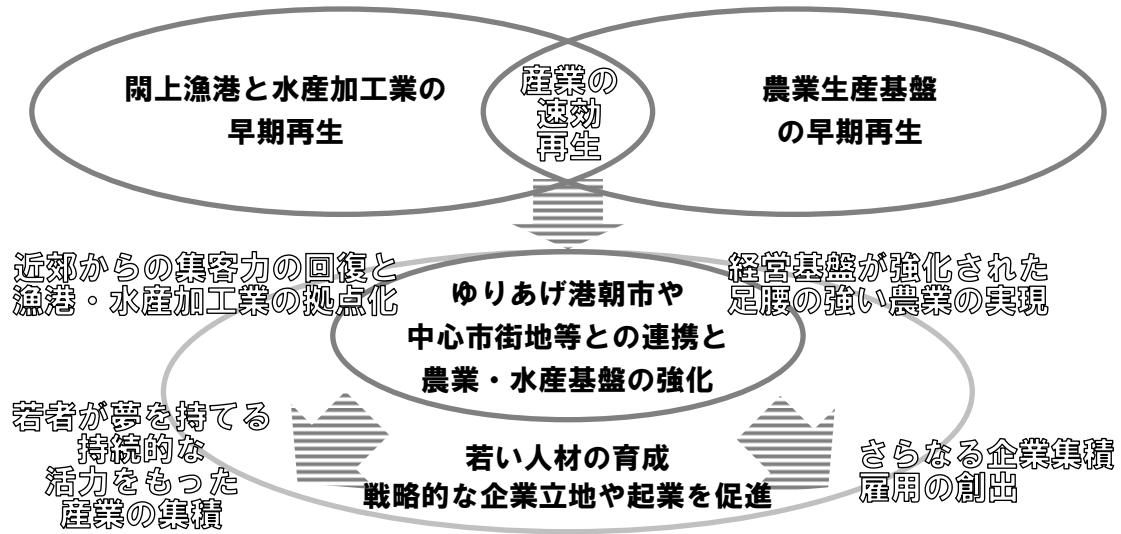
- ◇復興のための地区主体のまちづくり活動やコミュニティ再生の推進
(検討、計画策定、実行)
- ◇自主防災組織の設立と災害時避難への対応
- ◇地域の祭や伝統行事の再開
- ◇積極的な住宅供給への参加（民間事業者）
- ◇NPOなどによる遊び場（プレーパーク）の運営への参加

など

② 産業の速効再生プロジェクト

連携プロジェクト
検討経過のアイデア

● 連携プロジェクトが想定する将来イメージ



◇ 関上漁港と水産加工施設、交通インフラの早期再生

漁港及び市場や交通インフラの再建にあわせて、仮設工場から耐浪型の恒久的施設まで、水産加工業が段階的に事業再開できる環境づくりを推進し、生産機能と職を回復

◇ 農業生産基盤と農業経営の集約・強化

園芸農業施設の復旧、大区画ほ場整備の推進等を通じて農業生産基盤を再生し、営農再開の環境づくりを推進するとともに、地域農業の組織経営化、農地利用集積の促進等を通じて、農業経営基盤を強化

◇ 世界に通用する品質管理と仙台近郊の立地で水産加工業が集積する関上漁港

仙南の拠点港を目指した市場機能や水産加工業の共同利用施設等の整備、衛生認証取得などの管理強化、避難路を兼ねたICに直結する道路整備等を通じて水産基盤を強化し、他地域からの水産加工業や技術を集積

◇ “食”の交流を契機にした新たな地域ブランド

ゆりあげ港朝市や、中心市街地の賑わいイベントなどでの“食”の交流を通じて、漁業・水産加工業・農業の連携が進み、新たなブランド価値を創造

◇ 新たな起業や産業連携、イノベーションを担う若い人材の育成

地域の学校や近隣の大学・研究機関との連携を通じて、地域産業のイノベーションや産業連携、ブランド創造等を担う若い人材を育成

◇ 新たな企業の立地と起業による雇用の拡大

戦略的な企業立地と起業の促進を通じて、既存の地域産業が培ってきた技術を生かした新しい農水産物、商品・サービスを開発し、プロモーションを展開

● 推進に向けた短期的な検討課題

- ◇ 産業再生の戦略づくりと協議体制の構築
- ◇ 産業復興の事業計画策定、調整、合意形成等
- ◇ 世界に通用する品質管理と仙南の拠点港を目指した基盤整備の事業化検討
- ◇ “食”をテーマとした漁業・水産加工業・農業の連携と新たなブランド開発・プロモーションの環境づくり
- ◇ 新たな企業誘致や起業と既存の地域産業との技術連携・マッチング等の環境づくり

など

● 市民・企業等に期待される役割

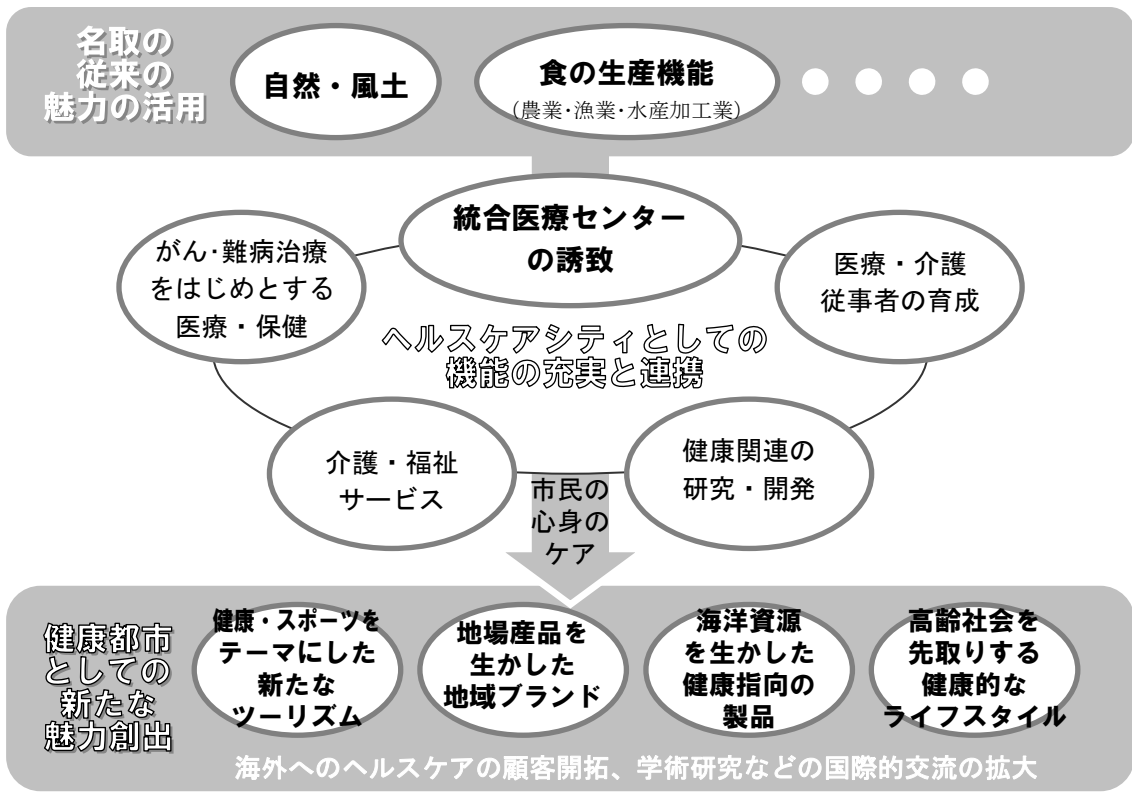
- ◇ 漁の早期再開、防浪施設と一体となった水産加工場の早期再建
- ◇ 地域人材の積極的な雇用
- ◇ “食”をテーマとした新たなブランド開発・プロモーションのための組織の設立・運営
- ◇ 名取の地場製品の販売、地場産品を活用した名物料理の開発（市内商店・飲食店等）

など

③ 統合医療で元気プロジェクト

連携プロジェクト
検討経過のアイデア

● 連携プロジェクトが想定する将来イメージ



◇健康をテーマにした新たなツーリズム

健康診断や医療行為の受診、海をはじめとする名取の自然で心身を癒すなど、週末や短期滞在を想定した新たなツーリズムを開発

◇海洋資源を生かした健康指向の製品

研究機関との連携を通じて、水産物や海水等に含まれる有効成分を活用した健康指向の製品を開発

◇地場産品を生かした地域ブランド

健康関連の研究と漁業・水産加工業・農業の生産技術の連携を通じて、新たな特産物の開発やブランドとしての価値を創造

◇高齢社会を先取りする健康的なライフスタイル

医療・健康、介護・福祉のネットワークと、自然と親しめる風土を背景に、健康的なライフスタイルをテーマにした居住を推進

◇医療・研究等をテーマとして国際的に拡大する交流圏

仙台空港からの近接性を生かして、海外へのヘルスケアの顧客開拓のほか、学術研究などの国際的な交流を拡大

● 推進に向けた短期的な検討課題

- ◇統合医療センターを核としたヘルスケアシティの構想の具体化と関係機関調整・コーディネート
- ◇核となる統合医療センターの誘致計画の具体化と条件整備
- ◇ヘルスケアシティとしての関連機能充実のための環境づくり
(具体化した構想に基づく誘致活動、土地利用や誘致に関する条件整備等)

など

● 市民・企業等に期待される役割

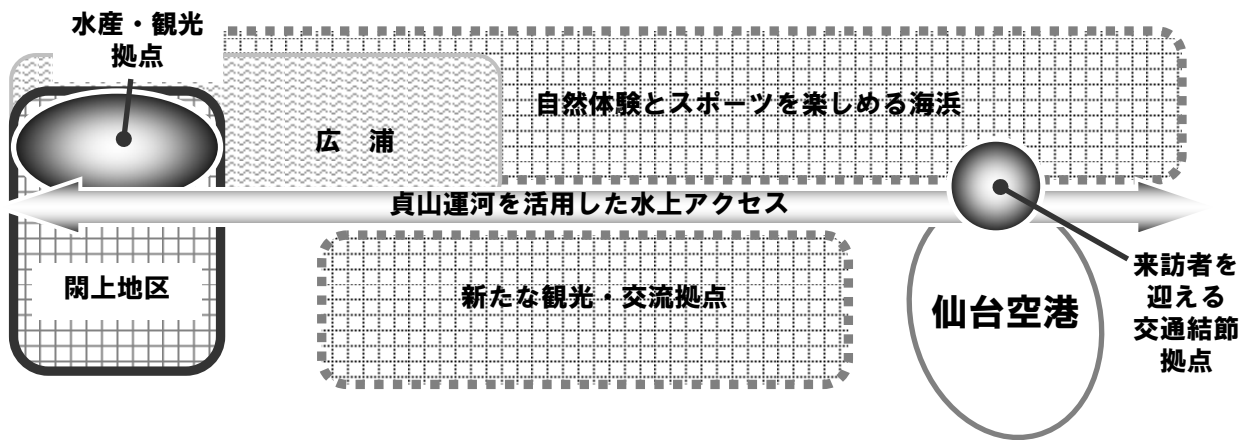
- ◇高齢社会を先取りした健康都市づくりに向けた推進体制づくり
(健康をテーマにした新たなツーリズム開発の体制)
(新たな地域ブランド育成や製品開発にむけた研究機関との連携)
(健康指向のライフスタイルを創造するための医療・ケアの連携)
- ◇名取の自然・風土を楽しみながら短期滞在・週末滞在ができる環境づくり

など

④ 空の道・水の道交流プロジェクト

連携プロジェクト
検討経過のアイデア

● 連携プロジェクトが想定する将来イメージ



◇来訪者を迎える交通結節拠点

仙台空港の利用者を名取に迎え入れ、送り出すためのゲートウェイとして、円滑な乗換えや情報案内、サービス等の機能を導入

◇貞山運河を活用した水上アクセス

仙台空港から閑上地区をつなぎ、貞山運河を利用して、来訪者を名取に誘導する水上のアクセスルートを整備

◇新たな観光・交流拠点（貞山運河西側）

宿泊、健康・リラクゼーション、海の学習・研究・交流施設など、仙台空港を利用する多くの人々が名取を訪れる目的とする魅力ある観光・交流機能を充実

◇自然体験とスポーツを楽しめる海浜

広浦のスポーツ利用（例えば漕艇場）に向けた整備と浚渫土の活用など、海浜の防災対策と一体となって、自然体験とスポーツを楽しめる場を再生

◇水産と観光の拠点（閑上・貞山運河東側）

海の様々な魅力を楽しむ拠点として、フィッシング、マリーナ、ビーチ、朝市などの機能を再生・強化

● 推進に向けた短期的な検討課題

- ◇沿岸地域活性化振興ビジョンの策定と行政・事業者等の役割・協働のあり方の検討
- ◇民間投資などを活発化させるための環境整備
- ◇海浜と貞山運河・広浦の再生・活用に向けた国・県との協議調整
- ◇閑上漁港と水産加工業の再建を連動した閑上地区における水産・観光拠点のビジョンと事業化検討
- ◇津波被害を受けた農地の集約・再編と連動した再生困難な農地の活用方策の検討（仙台空港からの近接性を生かした観光・交流拠点としての活用可能性検討）
- ◇貞山運河・広浦周辺の観光軸としてのポテンシャルを踏まえた水上アクセス及び仙台空港につながる交通結節拠点の整備のあり方の検討
- ◇民間事業者の参入の環境づくりの検討

など

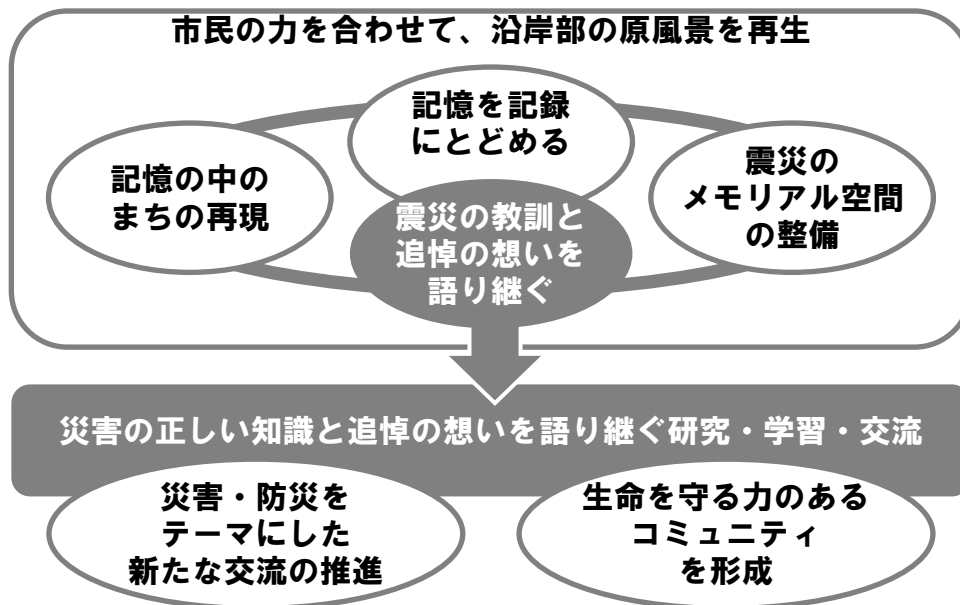
● 市民・企業等に期待される役割

- ◇ビジョンにそった事業参入（投資）と地域人材の雇用（民間事業者）
- ◇NPOや市民による観光ボランティアガイドの要請・実施

など

⑤ 記憶のまちプロジェクト

● 連携プロジェクトが想定する将来イメージ



◇沿岸部の名取の原風景

たくさんの市民の力を生かして、浜や防潮林、広浦、貞山運河、増田川などの豊かな自然や歴史遺産などの原風景を再生

◇震災の記録・記憶をとどめるアーカイブス

震災の記憶・記録を蓄積・整理し、教訓として活用できるよう資料化・教材化を進めるとともに、公開・閲覧の施設等を確保

◇記憶の中のまち（閑上の面影）

舟運のまちとしての名残を残す町割りや昔ながらの商店の看板等、まちの面影を感じる市街地を再建

◇震災のメモリアル空間

日和山を核として、メモリアル空間を整備（追悼のイベント、犠牲者を偲び、祈る場所、震災からの復興を実感する象徴など）

◇災害・防災をテーマにした新たな交流

震災後のボランティア・支援活動、追悼のイベント、防災研究・学習を通じて新たな交流を拡大

◇生命を守る力のあるコミュニティ

震災の教訓を生かした研究・学習・交流を通じて、災害の正しい知識と避難（減災）の方法などの定着を学校教育から地区へと拡大

● 推進に向けた短期的な検討課題

- ◇地域資源再生に向けた国・県・隣接市等と連携・調整
- ◇震災の記憶・記録の早期の収集・資料作成の体制づくりと公開・閲覧場所の確保
- ◇閑上地区の復興に向けた事業計画に取り込むための「記憶のまち」「震災メモリアル空間」のイメージの具体化

など

● 市民・企業等に期待される役割

- ◇次代へと震災を語り継ぐ市民活動の展開
- ◇災害・防災をテーマにした交流と人材・組織のネットワークづくり
- ◇学校から地区へと拡大する防災学習・防災訓練の体制づくり
- ◇震災メモリアル施設の運営の参加

など



図：沿岸部復興イメージ